



慶應義塾大学 文学部

Keio University Faculty of Letters





02	3 Key Features 慶應義塾大学文学部 3つの特徴
04	Words of Welcome 総合知の獲得を重視する慶應義塾大学文学部 佐藤孝雄
06	Special Talk 内藤正彦さんスペシャルトーク
10	Student Interview 現役学生へのインタビュー 文学部の学びと魅力とは
14	My Research 研究紹介 松本直樹・上杉 誠・寺澤悠理・渡辺丈彦・片山由有子・大畠健太郎・金子奈美・岡田一祐
22	Alumni Voice 卒業生の声 大きな問いにじっくり向き合える時間 / 文学部でしかできない経験 幅広い知識を得ることができる / 人の動きや社会の動きを学ぶ
24	Departments 専攻・部門ガイド 哲学 / 倫理学 / 美学美術史学 / 日本史学 / 東洋史学 / 西洋史学 / 民族学考古学 国文学 / 中国文学 / 英米文学 / 独文学 / 仏文学 / 図書館・情報学 社会学 / 心理学 / 教育学 / 人間科学 / 自然科学 / 諸言語
43	Graduate Schools 大学院
44	Research Institutes 研究所
45	Correspondence Courses 通信教育課程
46	Study Abroad 留学のすすめ
48	Scholarship 奨学金
50	Open Campus 2025 オープンキャンパス2025
51	Extension Program 公開講座
52	Data 入試データ & 進路
53	FAQ よくある質問
54	Campus Map キャンパスマップ

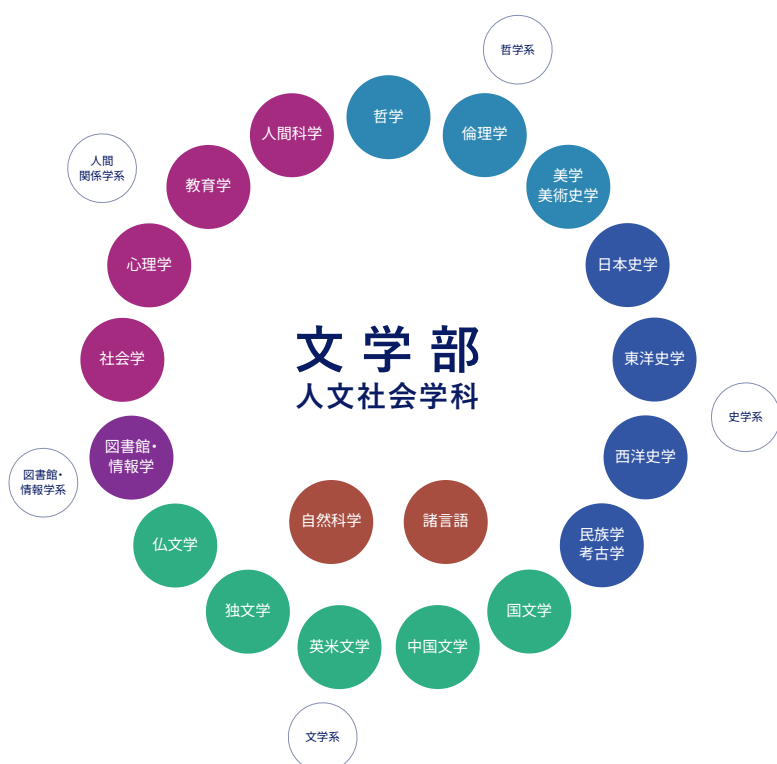
Keio University Faculty of Letters

3つの特徴

3 Key Features

1

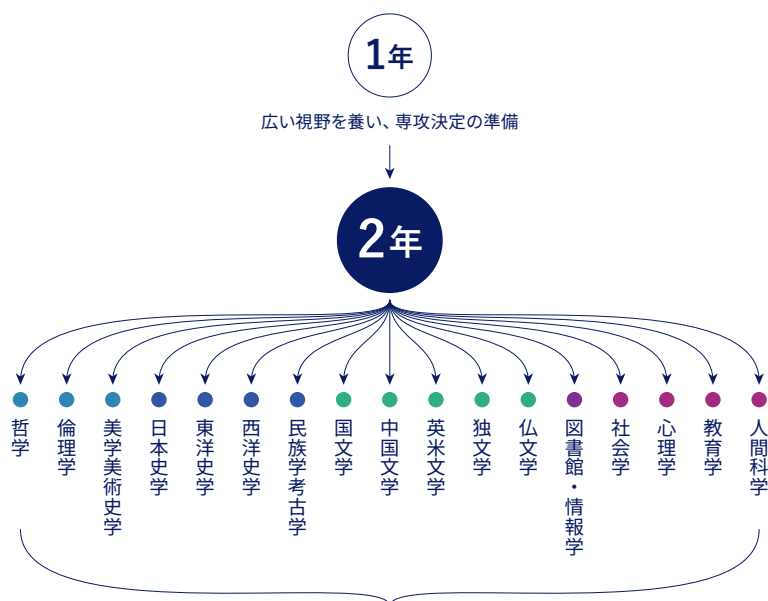
17専攻 + 2部門という 幅広く横断的な専攻分野



慶應義塾大学文学部は、「文」に関するすべての領域を対象にした研究教育機関です。そのカバーする研究領域は幅広く、従来の“文学”のイメージをはるかに超え、学問・芸術・科学を包含する「知」そのものです。各国語を駆使した文学系から、哲学系、史学系、図書館・情報学系、人間関係学系、さらに自然科学までも含まれます。

独立した多彩な専攻と、それらを横断して学べる学習システム。全ては、“言葉 = Letter”を媒介として知の集合体へと結実していきます。これこそが他に類をみない慶應義塾大学文学部の特徴と言えます。

2

専攻選択は2年次からという
“学問の自由”

学問の自由

文学部へ入学した新入生は、1年次を日吉キャンパスで過ごし、総合的な視点を養います。そこでは、基礎的な科目と同時に「特論」「総合教育セミナー」と呼ばれる専攻への橋渡しを行う科目が存在します。専任教員がそれぞれの研究分野の授業を少人数で行います。こうした試みの中から2年次からの専攻を決めることができるというユニークなカリキュラムを実施しています。つまり1年次は単一学科の学生として入学し、1年かけて自分が進むべき専攻をじっくりと見極めることができるのです。

そこには学問を自分自身のものとして成長するための自由があります。

3

多彩な人材を輩出する
130有余年の歴史

文学部は1890年に大学部創設と同時にスタートしました。まさに私学最古の文学部といえる歴史を誇ります。森鷗外が開学当初に審美学を担当しているなど、文学だけでなくリベラル・アーツを網羅していました。その後も、永井荷風、西脇順三郎、遠藤周作、折口信夫、井筒俊彦など、数多くの独自の世界を築き上げた著名な詩人、文学者、民俗学者、哲学者が学生として、教員として文学部を作り上げてきました。

文学部の教育・研究には、創始者福澤諭吉の「半学半教」の精神を受け継ぎ、教員と学生がお互いに切磋琢磨し高め合う精神が今でも息づいています。文学部はこの130有余年の歴史の中から、学術・文化的側面だけでなく広く社会、経済分野に至るまで、数多くの優秀な卒業生を輩出してきました。

Words of Welcome

慶應義塾大学文学部を志望されるみなさんへ

総合知の獲得を重視する慶應義塾大学文学部

慶應義塾大学文学部（Faculty of Letters）は一般にイメージされる「文学部」とは性格を異にする学部です。私たちは「文（Letters）」を広く「学芸」（学問・芸術・科学）全般を包含する「知」を意味する語として捉えています。「文学部」での学びとして一般にイメージされがちな文学や言語学に向き合う分野ばかりでなく、人文社会科学ひいては自然科学に及ぶ多様な分野の集合体である点。それが本学文学部の最大の特徴です。

国内外問わず、今日世界中の大学の研究・教育は、ギリシャ哲学と一神教の世界観に根ざす西欧近代科学によって体系作られており、事象の区別による専門分化を志向するという特徴を持ちます。それだけに、上記の特徴を持つ本学部に対しては、なにやら具体性に欠き、掴みどころない学部という印象を抱く方もおられるかも知れません。しかしながら、今日、学問の専門分化が行き詰まりを迎えているのも事実です。

例えば、西欧近代科学では、動物を研究対象とするのは動物学、人間を扱うのは人類学と区別されます。この背後には、動物と人、自然と文化を対置する二分法的な思考が存在するわけですが、実のところ両者は分かち難く結びつき、相互に影響し影響され合う関係にあり、包括的に調査・研究しなければならない対象でもあります。また、北米北西沿岸の先住民が自らの出自を動物と結びつけて考えているように、私たちの種には異なる事象間に繋がりを見出す感性、流動的知性も備わっています。

凡そこの世界に存在する事象が多くの生物・無生物が複雑に絡み合う「万物照応」とも呼ぶべき様相を呈していることにも鑑みれば、私たちは、異なる事物・事象に繋がりを見出す流動的な知性も呼び覚ますべきでありましょう。幅広い学問分野を内包し、日常的に領域横断的な対話や議論も交わされている慶應義塾大学文学部は、専門知のみならず総合知も育む学部であると自負しています。「半学半教」を重んずる自由な学風の中、本学部で学ぶ皆さんは、専門性を深められると同時に、多角的かつ包括的な視野も育めるはずです。

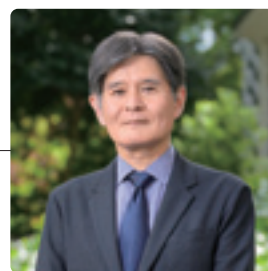
5学系17専攻・2部門が提供する 学びの自由

慶應義塾大学文学部では、「人文社会学科」の一学科制を敷き、その下に5つの学系と17の専攻（哲学系：哲学、倫理学、美学美術史学／史学系：日本史学、東洋史学、西洋史学、民族学考古学／文学系：国文学、中国文学、英米文学、独文学、仏文学／図書館・情報学系：図書館・情報学／人間関係学系：社会学、教育学、心理学、人間科学）、さらに自然科学と諸言語の2部門を置いています。関連する大学院としては、文学研究科および社会学研究科があります。本学部には、学内10学部中、理工学部、医学部に次ぐ数となる150名余りの専任教員が所属しています。各教員は独創的な研究活動を活発に進め、それぞれ国内外の専門分野で注目を集める成果をあげています。

学部の定員は一学年800名。1年生は専攻を特定することなく入学し、広々とした日吉キャンパスで、多様な学問分野に触れ、幅広い教養を習得するとともに、「知」の基盤をなす語学の習得に努めます。2年以降は伝統ある三田キャンパスで17専攻のいずれかに所属し、専門的な研究に取り組みます。文学部を特徴付ける教育の形態としては、少人数教育をあげることができます。ゼミ（研究会）や



文学部長 佐藤孝雄



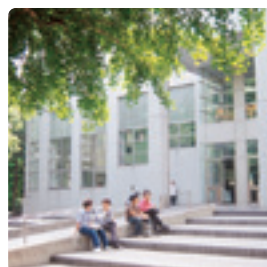
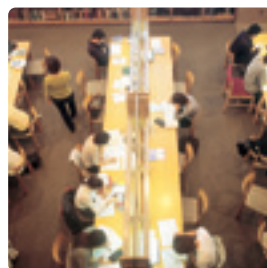
各種演習科目など、三田キャンパスで開講される授業科目の多くが小規模であるため、教員と学生、さらに学生同士の間には緊密な関係が築かれます。

慶應義塾大学文学部の伝統と革新性

建学者の福沢諭吉が残した「自我作古^{じがさっこ}」という言葉は、今日なお慶應義塾が大切にしている信条の一つです。「我^{われ}より古^{いにしえ}を作す」と読むこの言葉で福澤は、如何なる困難や試練が待ち受けていようと、勇気と使命感を持って、前人未踏の新しい分野に挑戦せよと訓じました。

今日、私たちは、地球環境の悪化や、国や地域を超えて進むグローバル化、さらにはAIの発達に伴って生じる新たな社会問題など、既存の知識や仕組みでは対応しきれない数多くの難題に直面しています。新型コロナウイルス感染症により対面での活動が制限される状況に陥ったことは記憶に新しいところですが、今後も環境や社会に如何なる変化が生じるかわかりません。そのような時代に生きる私たちは、人間・社会・自然などに対する総合的な知識と、論理的かつ柔軟な思考力を身につけなければなりません。

過去から現在に至る人・社会・自然を扱う多様な分野を抱え、既存の学問体系の脱構築も目指す慶應義塾大学文学部は、激動の時代に挑むために必要な知識と能力を提供できる学部であると自負しています。その意味で、本学部は、1890（明治23）年の創設以来130年以上もの長きに亘る伝統をもちつつも、革新的な学部とあるといえます。



Special Talk

Naito Masahiko



内藤正彦さん

Profile

1967年生まれ。テレビ朝日取締役、同報道局長。

慶應義塾大学文学部を卒業後、テレビ朝日入社。

取材部、社会部（KC庁クラブ、司法クラブ）、外報部を経て、

カイロ支局長、ロンドン支局長、報道局ニュースセンター長などを歴任。

主に中東地域の専門記者として紛争地や戦地を取材。

共著に危険地報道を考えるジャーナリストの会（編）『ジャーナリストはなぜ「戦場」へ行くのか

——取材現場からの自己検証』（集英社新書、2015年）がある。

テレビ朝日取締役・同報道局長である内藤正彦さんは、
文学部を卒業後、テレビ朝日の記者として中東地域を中心に
紛争地や戦地を数多く取材されてきました。
報道の最前線で活躍されてきた内藤さんは、
「慶應」での生活から何を学び、何を得たのでしょうか？
今回はご自身の学生時代や報道の現場、
そして慶應義塾への思いについて語っていただきました。



インド放浪、民族学考古学専攻

一年生の夏休みに700ドルを持ってインドの南西部を放浪したんですね。藤原新也さん¹の『印度放浪』に憧れていて。当時の700ドルといえばそれなりのお金でしたし、なにせ19歳と若かったので、そこでは楽しく過ごしたのですが、帰国後に劇症肝炎手前のウィルス疾患を発症してしまいました。哲学が何かのレポートを日吉キャンパスに提出しに行った翌日、42度の発熱で奥歯がガチガチとなったんです。父親に地元の病院に連れて行かれたときにはもう意識がないような状態で、そのまま入院しました。最初はコレラと診断されたので、日吉キャンパスでは並木道から1年生の教室までを消毒しなければならなくなって、大学にはご迷惑をおかけしました。ただ当時の先生にインドでの体験をお話ししたら「その調子で思い切って頑張りなさい」と励まして下さって。あとになって考えると、この先生の言葉がとても大きかったと思います。

2年生になって民考（民族学考古学専攻）に進みました。

先生方も面白かったのですが、とにかく先輩たちが個性的というか、バラエティ豊かというか、とても刺激的でしたね。皆さん、自分の世界を持っていて、自分が興味のある事しかない。他人に干渉しない文化がとても心地よかったですね。民考って、当時のバブルに浮かれた慶應のキャンパスとは隔絶された世界だったじゃないですか。奇人変人というか、「俗っぽさ」がないんですよ。本当に自由闊達に、好き勝手やっていたというのが素晴らしかった。ただ、これでこの先どうなるんだろうって思っていましたけどね。

当初はモンゴルや遊牧民、江上波夫さん²の騎馬民族説などに興味があったのですが、当時のソビエト政権下では現地に入ることが難しかった。ちょうどその頃、[文学部東洋史学専攻の]坂本勉先生から「遊牧民なら“世界最大の少数民族”クルドも面白いよ」というアドバイスをもらったんですね。クルドについて当時の日本ではほとんど報じられていませんでしたが、世界的には、例えば『シュピーゲル』³

などでは注目されていました。それなら実際に現地に足を運ぶことができるので、夏は毎年、トルコとイランの国境地帯を見てまわる生活をしていました。まずイスタンブールに行き、そこから東へ東へ移動して、ディヤルバクルという都市まで、そしてイランに入りました。イラクには入れませ

んでしたけど。あと、ヤマンラール水野[美奈子]先生が三田キャンパスの言語文化研究所でトルコ語を担当されていたのですが、水野先生から旦那さん(アイドゥン・ヤマンラールさん)を紹介してもらい、色々可愛がってもらいました。

進路、就職、報道の現場

当時の日本はいわゆるバブル時代で平穏なムードでしたが、国外に目を向けると、ベルリンの壁が崩壊し、ソビエト連邦が溶け始めつつありました。とにかく世界が大きく揺らいでいた時期です。私が最後にイランを訪れたのはイラン・イラク戦争が終わる1988年です。このときに、イラン北西部のトルコとの国境にマーカーという小さい町があるのですが、そこで暴動が起きてクルドが大変なことになるって、私自身も巻き込まれました。その後、イラクのハラブジャという町では5,000人規模のクルドが化学兵器で虐殺されました。こうした事件に大きなショックを受けたのですが、メディアではほとんど報じられなかった。湾岸戦争(1991年)ではCNNがバグダードから中継をして現地の映像が配信できるようになりますが、イラン・イラク戦争の頃はまだありませんでした。

就職への意識は極めて低いダメな学生でしたが、とにかく、そうしたことがあって報道機関に入りたいと思うようになりました。実のところテレビにもメディア業界にもまったく興味はなかったのですが、ありがたいことに今の勤め先に

雇ってもらいました。しかも29歳でカイロ支局長にしてもらい、とても自由に働くことができました。結果をしっかりと出せばやりたい事をいくらでもやらせてくれる社風は、自分に合っていたと思います。

中東地域の紛争地や戦地の報道はとても大きく変わりました。私が現地で取材していた当時は、まだスマートフォンで撮影するなんてできない時代ですから、高価なENGカメラ(ショルダーカメラ)を持って入ると、アメリカでもイギリスでもない日本のメディアが来たといって現地の人々が守ってくれたんですよ。そこそこ現場に行けば仕事が成立するというか、そうしたかたちでずっと展開していました。ところが、2003年から2004年ごろから、このビジネスモデルは完全に崩壊します。現地に行き、足で稼ぐ、映像とファクトを詰めて、それを出すというのが成立しなくなったんですね。例えばイスラム国(IS)ですけど、彼らは自分たちのプロダクションを持って、そこで映像を作成して、虐殺の瞬間を撮って、それを自分のチャンネルにアップロードしたりする。自分たちで作れるようになったんですよ。私がロンドン支局

内藤正彦さん(左)と佐藤孝雄文学部長(右)



長だったのは、ちょうどアラブの春とかシリアの内戦、リビア戦争があった時期（2011年前後）ですが、その頃、それまでの仕事の仕方ではちょっと厳しくなってきたっていうのを肌で感じました。あと最近は、平たく言うと理系の世界になってきてるというか、デジタルで取材して、AIを駆使して、世界中に飛び交う映像と情報をいち早く察知して、そのファクトチェックをする。足で稼ぐ我々の時代とは仕事の仕方が全く違ってきています。とはいえ、「日本人の目で見て、日本人に届ける」ことはやはり大きいので、これをどうにか復活させないといけないとは思っています。だから若い人には、デジタルネイティブの人間が現場に行ってそれを駆使しながら、フィジカルなコンタクトっていうのを取ってほしい

ですね。そのアナログとデジタルの二つがうまく融合したかたちじゃないと、新しいものって生まれてこないんですよ。

そういう意味で時代は再び乱気流に入ったなという感じがするんですけど、この間、二郎⁴のオヤジに「この面白い時代に慶應のキャンパスで過ごせる学生って、色々な事が出来るだろうな」なんて言ったら、「冬のアフガンの塹壕で凍えてた野郎が!」って笑われました。もう30年の付き合いになるんですけど、私がアフガニスタンから戻ったら、「豚食っていないだろう」ってごちそうしてくれたんですよ。私がロンドンにいたときには、『ガーディアン』⁵に紹介されたりして、冗談かと思いましたもんね。『ガーディアン』ですよ。

慶應らしさとは

今考えると、文学部や民考の「空気」が良かったですね。みんな好きなことしかやっていない、みたいな。慶應ブランドとか、同窓・同門ですぐ群れたりするのが好きではなくて、「慶應ボーイ」とは程遠い、一般的な「らしさ」とは対極的な学生でした。今でもあまり好きではありませんけど、とにかく学生時代は慶應的な事やモノに背を向けていたと思います。ただ今になって振り返ると、実はこれが意外と慶應っぽんじゃないかと。慶應義塾の「独立自尊」ってそういうことなんじゃないですかね。正直なところ、非慶應的なところで生きてきたと思うんですけど、今思うと、当時の自分がやってきたことって、極めて独立自尊の世界に守られていたというのはあるんですよ。それって、社会に出る前の自分を作ってくれた価値観とか、自分を守ってくれたキャンパスの「空気」とか。この歳になって、慶應義塾に自分の基礎をつくってもらったと改めて感じますね。民考はそれこそ独立自尊の極みのような空間で、一癖も二癖もあるエラく尖った人たちが多かったですから、遠慮も引け目もなく、自分の

感覚とか感性を信じて、トライ&エラーの日々を楽しく過ごせたと思います。もちろん「なんてところに来ちゃったんだろう」とも思いましたけど。

慶應の文学部って、今の世の中の動きだとか、そういうものを広く感性や感覚を含めてつかんで、自分がこの先どこに行こうかっていう指針を決めるには、とても良い学部だと思います。色々な人と会って、色々な学問の匂いに触れる場でもありますよね。色々な情報が入ってきて、「学問の総合商社」みたいなところがあるんですね。情報ってネットに氾濫している時代ですけど、耳学問というか、一緒にご飯を食べたり、二郎で並んでるときに聞く言葉とかってインパクトが全然違うじゃないですか。入ってくる強さが違ったりするので。そういうときに私は慶應の文学部っていいなと思いますね。

¹ 藤原新也（ふじわら しんや、1944年－）：日本の作家・随筆家、写真家・旅人。

² 江上波夫（えがみ なみお、1906年－2002年）：日本の考古学者。東京大学名誉教授。文化功労者・文化勲章受章者。

³ 『デア・シュビーゲル Der Spiegel』：1947年に創刊されたドイツのニュース週刊誌。

⁴ 東京都港区三田に本店を構えるラーメン店。創業から塾生・塾員との結びつきが強い。

⁵ 『ザ・ガーディアン The Guardian』：1821年に創刊されたイギリスの日刊紙。



現役学生へのインタビュー

文学部の学びと魅力とは

英米文学専攻4年生、仏文学専攻4年生、独文学専攻3年生（取材当時）に、
文学部の学びと魅力について語っていただきました。

— 慶應の文学部に入学した理由は何ですか？

K.S: 何となく文学部に憧れがありました。大学に入る前に、実際に何をやりたいか決まっていなかったので、2年生で専攻を選ぶというシステムが他の大学には見受けられず、魅力的に思っていました。慶應は大きな大学なので、高校とは違っていろいろな人と知り合えるのも一つの理由です。それから、ここの入試が合っていたというのは結構大きいかなと思います。

N.H: 文学部で文学を学びたいと思っていたのですが、その中でも一番大きな決め手になったのは、入試本番で小論文の問題を解いている時に、この問題を作った、この大学のこの学部に入りたいと強く思ったからです。私の解釈ですが、そういう考え方も不正解じゃない、あっていいよねと言ってくれているような、問題文と会話できているような感じが嬉しくて、この大学に入ったらもっと世界が広がるし、こういう考え方をしてもいいと許容してもらえるのが魅力に思い、入学を決めました。

S.T: 私は高校生の時から文学部にはしようと思っていたのですが、興味のある分野が多く、専攻を決める時にも悩みました。1年間かけて決められる慶應の文学部は自分に刺さったというか。受験で自分の未来を決めなきゃいけない時に猶予が欲しかったのですが、それが慶應にはありました。地方出身なのですが、コロナの時期でオープンキャンパスも無く、実際に見てから決めることができなかったのも、不安を持ちながら受験会場に来て、担当してくださる先生や設備を見て、ここがいいなと思いました。

— 実際に日吉で1年間を過ごしてみているかがでしたか？

K.S: コロナ禍2年目で、日吉キャンパスには語学とバレーボールのため、週1日通っていました。日吉で過ごした感じはしなかったのですが、その中でも英語の授業を受けている友達と専攻選びを相談したり、興味ある分野について周りの人から聞けたりしたのは面白かったです。英語の小説をオンラインで分担して読み、解釈を話し合う授業があり、受講生や教授の解釈を聞くのは人生初めてのこと

で、楽しくて意外に得意かもしれないと思い、英米文学専攻を選びました。

N.H: 私は第二外国語のフランス語を取ったのですが、文法にしても発音にしてもとにかく意味が多すぎて、どれが正解とかもないので苦手でした。せっかくだから毎週質問する勢いでやっているうちに、苦手だった意味の多さがむしろ味に感じて来たというか、面白いなと思うようになり、その背景にある文学や文化にも興味を持ち、仏文学専攻を志望しました。1年間で嫌いから好きになったプロセスを踏んでいるので実感があり、この1年間があったからこそと思います。

S.T: 1年間で選べる教科が多く、ワクワクしていた覚えがあります。取捨選択ができる分、いい意味で自分を持たなきゃと思え、自分のやりたいことに向き合えた1年でした。専攻ガイダンスで、独文の先生方が「ドイツ語に関係していればなんでもいいよ」と言ってくださって、先輩方の卒業研究も幅広く、「これドイツに関係あるの?」みたいな研究もあり、ここなら自分が1年間で触れて来た興味ある国文学や英米文学、社会学などを捨てずに、自分の研究もできると思い、最終的に独文学専攻を選びました。

— それぞれの専攻での学びや特色を教えてください。

K.S: 英米文学専攻は、イギリス文学やアメリカ文学だけでなく、アメリカの映画や音楽、文化、さらには現代の言語学や英語史、音声学など、全てを学べる専攻で、領域の広さが特色です。2年生の時に必修で基礎を学び、全てに触れた上で専門的なことに進みます。僕はもともとアメリカの映画や文化的なものが好きで、演劇をやっているのもあって、日本の演劇に近いアメリカの演劇を専門的に学んでいます。戦前からの伝統ある専攻で、詩人の西脇順三郎も教授をなさっていた時期もあり、歴史あるカリキュラムを継承しているのも特色の一つだと思います。

N.H: ゼミでは3年生の時から、カミュの『異邦人』を研究していて、4年生では主人公の言動の背景にある心情の動きについて、いろいろな角度から分析しています。他の人の解釈を聞いたり、アドバイスも頂いたりしています。先輩と研究分野が重なった場合も、先輩と私で考え方が違うので、同じ作品でも違う読み方ができ、先輩が参考に使っていた先行研究を隠れて読んで真似してみたり、難しかったのですが、刺激になりました。同じ作品でも研究している人が十人いたら十人分の解釈が生まれてくるので、そのような解釈の可能性の広さも仏文学専攻の学びの特色だと思います。

S.T: 私は独文学の中でも『グリム童話』に興味があり、基礎的な問だけでなく、今どのように受け入れられているのか、などを考えています。ドイツ語は文法がしっかりしている言語なので、順番を入れ替えただけでニュアンスがかなり変わってきて、日本語にも通ずるところがあり、文法から読み込めるのも特色だと思います。少人数のアットホームな雰囲気、一人一人が違う意見を持っていて、意見を語る時間も長くなるからこそ、話し合いが深まってゆき、それが自分に合っています。卒業までに3つのゼミを取る人も多く、いろいろな分野について学びを深められるのも、他の専攻にはない特色だと思います。

— 文学部で学べて良かったと思ったことはありますか？

K.S:僕は演劇の団体を主催していて、将来は脚本も書いていこうと思っています。実際ゼミで研究することによって、初めて演劇をアカデミックな視点で見ることができ、評論家などが積み上げてきたものを吸収することができました。自分が見たり考えたりしたものだけでなく、先人の知恵を借りて、アカデミックに演劇ができるのは自分の武器だと思っているので、そこが文学部で学んで良かったことですね。

N.H: 私は就活で自分の幼さや至らなさを突き付けられることがたくさんありましたが、文学部での学びが考え方の拠り所になり、励まされました。仏文学専攻以外の方とも授業で一緒になって関わることができ、全く自分とは違うことを考えている人たちに刺激を受けました。就活していると視野が狭くなりがちで、目の前の至らなさや自分のできなさ、しんどさばかりに目が行きがちですが、授業を受けたり、ゼミに参加したり、自分の研究を進めたりする中で、自分には価値がある、その企業が合わなかっただけと思えた、学びの場所でもあったので、文学部で良かったと思っています。

S.T: 国語科教員の教職課程を取っていて、塾でアルバイトをしているのですが、どうすればわかりやすく伝えられるか考えるようになり、成長したように思います。大学で複数の視点を学んだことでそれを教えることができるし、伝えることができる。物語の面白さや古典が今につながっていることなどを実感として得られたので、自分が教える立場になってみて、大事なものは何かを考えられるようになったと思います。

Student Interview

— サークル活動やアルバイトはしていますか？ 学業とどのように両立させていますか？

K.S: 塾で中学生に国語を教えているのですが、背景を考えながら深く読んでみると、意外と中学生でも興味を持ってくれるのですよね。文学部での学びは皆好きだし、興味あることなのかなと思いました。課外活動は演劇のサークルに入っていて、日吉と三田を行き来しています。そこからさらに自分の劇団を作って、半年に1回くらいですかね、脚本や演出をやって、たまに出たりもしながら公演を行っています。自分の公演でやっていることを卒論に活かしたり、卒論を書いていて次の脚本のアイデアが浮かんだりと相互に作用していて、自分の中でうまくいっているように思います。

N.H: 私は合気道の道場に通い、コンビニのアルバイトもしているのですが、どちらも自分の心が休まるスポットを作り、新たな刺激を得るために続けています。特に合気道は老若男女さまざまな方が集まるので、その中で自分の価値観をアップデートするようにしています。つい最近もチェコスロバキアやスイスの方がいらっしゃったので、フランス語や英語で話しかけ、文化や価値観の違いを実感しました。まとまった時間は取りづらいので、空きコマを利用して図書館の1人席で課題に取り組んだり、テストや課題が集中する時期はバイトと合気道を減らしたりして、両立するようにしています。

S.T: 塾でのアルバイトに加えて、ビッグバンドジャズのサークルでトロンボーンと財務管理をやっています。周りの人には「仕事多くない?」と言われるのですが、全ての活動に対して自分が楽しいと思いながら取り組んでいて、それが一番の秘訣だと思います。時間的な問題はどうしても出てくるので、メリハリですね。勉強は家に持ち込まないと決めて、大学では空きコマの時間に一気に勉強を終わらせています。バイトではバイトに集中して、サークルでは友達とコミュニケーションをとって、家に帰ったら頑張ってお家事をパッと終わらせて、パッと寝るのを毎日やっています。

— 将来の進路についてはどう考えていますか？

K.S: 現時点では演劇を続けて、1年に2、3回は自分が主催する公演を行い、脚本のコンクールやYouTubeの脚本もやっているの、そういうのを書いていこうかなと思っています。しんどくなったら別の道も考えると思いますが、自分が楽しいと思えているうちは続けて行こうと考えています。

N.H: 私は電力会社に内定をいただきました。エネルギー系の分野に興味を持ったきっかけは、一人暮らしをしていた時にお風呂のお湯が止まってしまったことがあって、本当にわずかな時間でしたが、とても不便に感じた経験でした。今まで当たり前に思っていたことが当たり前でないとわかり、皆の当たり前を支えてみたいと思い、エネルギー系を志望するようになりました。

S.T: 就活真っ只中で、いろいろな企業のオープンカンパニーや説明会に参加しています。現時点で興味があるのは出版関係や教育の分野です。ただ、教職を履修しているので、あまり本腰を入れて就活をするというわけではなく、自分の幅を広げ、どのような進路があるのかを学んでいます。大学院の進学も考えていて、縁があったら教員として働くことを視野に入れつつ、もし良い企業とめぐり合えたらと考えている状態ではあります。

— 文学部への進学を考えている方々にメッセージをお願いします。

K.S: 新しいことを知ることのできた4年間だったと思います。大学に入る前の高校生までの間と、この4年間で知ったことは同じくらいだと思っていて、図書館を歩いて背表紙を眺めているだけで知らない情報に出会い、大学に通ってレポートを出してテストを受けるだけでも、どんどん新しいことを知ることができる、そんな環境は大学でしかないと思います。特に慶應の文学部は、広い視野で自分のやりたいことを見つけられ、新しいことに出会える場所だと思うので、ぜひそれを楽しみに来ていただきたいです。

N.H: 実は私は高校2年生までは理系だったのですが、問題を解いていく中で文系にシフトしました。進路に悩んでいる方には、問題との相性で探してみるのもおすすめです。また、頑張れない時には、周りの人に「私、絶対この大学のここの学部に行きます」と宣言すると良いと思います。私は高校の先生に宣言をしたことで頑張れました。慶應の文学部の問題を解いてみて、来てくれたら嬉しいです。

S.T: 地方出身の私にとって、東京は大都市のイメージで、地方の大都市とは全て違いますし、環境が一新します。地元では絶対に得られない経験が、東京で、ここ慶應で得られると思います。慶應の文学部では広い分野から自分のしたいことを選べる自由を味わうことができます。その中から1つを決めるのは難しいのですが、難しい選択を通してもっと大人になれると思うので、ぜひ来ていただけたらと思います。



広報担当教員：綾井桜子、恋田知子、五味知子（後列左から）



英米文学専攻 **K.S**さん
東京都私立高校出身



仏文学専攻 **N.H**さん
埼玉県私立高校出身



独文学専攻 **S.T**さん
新潟県公立高校出身



My Research

知識情報基盤としての 図書館とその研究

図書館・情報学専攻 [教授]

松本直樹 Matsumoto Naoki

専門領域：図書館・情報学

研究内容：公立図書館の制度・経営を中心に研究しています。特に、外部環境との相互作用の中で公立図書館がどのように事業を形成しているかを、行政学等、学際的アプローチを使って明らかにしてきました。得られた知見をもとに、コミュニティの知の拠点としての図書館のあり方を探っていきたいと考えています。

私はこれまで、公共図書館を中心に、制度、経営、サービスなど多様な観点から研究を行ってきました。最近では、戦前の図書館制度や、近年話題になることの多い指定管理者制度についても研究しています。指定管理者制度は、民間企業などによる図書館運営を可能とする制度であり課題も多くあります。また、図書館が効果的に機能するには、施設やコレクションに加えてそこで働く「人」が重要です。そのため、人材育成や専門職の認定制度にも関心を持って研究しています。これらの研究に加えて、自治体に設置されている図書館協議会などの委員として実践にも携わってきました。

図書館は、社会の中で知識、情報、データを収集し、組織化し、蓄積・保管し、提供する重要な機関です。そうした機関は、民主主義社会を機能させる上で不可欠です。このことは、誤情報や偽情報に代表されるような情報を考えれば当然ですよ。そして、社会がデジタル化しネットワーク化する中でも、図書館やアーカイブズ（文書館）などの機関がデジタル情報を適切に組織化し、蓄積・保管し、継承していくことの重要性は変わりません。私は、このような役割を果たす機関の一つである図書館に焦点を当て、その制度や経営について研究してきました。

図書館は歴史的に古くから存在してきましたが、「図書館学」として図書館自体を学問的な対象とするようになったのは19世紀以降です。バイエルンの図書館員、マルティン・シュレティンガーやコロンビア大学のメルヴィル・デュエイなどが経営の効率化という観点から研究に取り組むようになりました。その後、専門的・科学的な情報に焦点を当てたドキュメンター

ション運動が進展するとともに、人々の情報行動を研究対象に含めた「情報学」と呼ばれる学問が形成されました。そして、「図書館学」と「情報学」が結びつき、「図書館・情報学」という学問として欧米を中心に発展してきました。

図書館・情報学専攻は、1951年にジャパン・ライブラリー・スクールとして設置されました。これは、図書館学を学ぶことのできる日本で最初の学科でした。その後、長く図書館・情報学を学問・研究両面で牽引してきました。日本国内で図書館・情報学を本格的に学べる場は限られており、本専攻はその数少ない選択肢の一つです。図書館・情報学の領域は多岐にわたり、図書館以外にも情報検索、情報行動、メタデータ、学術コミュニケーション、デジタルアーカイブ、書物学などの幅広い領域が含まれています。そして、図書館・情報学専攻は、文学部にありつつも、文理両面からのアプローチが可能な専攻です。今後の可能性に満ちた学問と言えるでしょう。



My Research

過去の作品が 照らしだすもの

仏文学専攻〔助教〕

上杉 誠 Uesugi Makoto

専門領域：19世紀フランス文学

研究内容：19世紀フランス文学、とりわけスタンダールを対象に小説、伝記、自伝、旅行記、政治論、芸術批評といったジャンルの作品の読解に取り組んでいます。古代ローマ人、芸術家像、チチスベオの習慣、王政の原理、軍人の理想といった主題を通してあらわれる「名誉」の概念を取り上げながら、19世紀の作家たちが過去から継承した主題や理想をいかに変容させたのか検討しています。

妻の不倫を疑う夫がつぶやきます。「ふたりを殺してしまおう、法律はおれの味方だ。」これは、19世紀前半のフランスを舞台にしたとある小説のいち場面です。不倫をめぐる嫉妬や怒りの感情は今と変わらないかもしれません。けれども、法律も規範も常識もこの200年で大きく変化したようです。現在では自動車を目指す「voiture」という単語が、馬車を指していた時代。現在とつながっているようだけれども、素直に理解できるわけではない。私たちと19世紀の間には、そんな距離があるのかもしれません。

私が研究対象として扱ってきた作家スタンダール（1783-1842）の作品は、恋愛や冒険など小説らしい心浮き立つ場面がたくさんありますが、細部に目を向けると首をかしげざるを得ない個所にも出会います。とくに私が困ったのは、人物の心理を表すのに「美德」、「名誉」、「高邁」などモラルを示す言葉がしばしば用いられているのですが、その内実がよくつかめなかったことです。これらモラルの理想に注目しながら、旧体制（アンシャン・レジーム）から1789年のフランス革命を経て19世紀へと向かう時代の社会状況や価値観の変化を論じています。こうすることで、私たちがいま生きている社会の規範や常識を考えなおす手掛かりになるでしょう。

フランス語とフランス文学を専攻していき改めてよかったと思うのは、当初想像もしなかったものに出会えたことです。じっさい研究を通して、スタンダールが親しんでいたさまざまな作品、イタリア絵画やオペラ、ダンテやシェイクスピアといったお隣の各国文学、ホッブスやルソーの政治思想等々、関心は次々に広がりました。ある作品に触れることは、その背後にある

ジャンルも異なる無数の作品への扉となるようです。そんな広がりには、物語を読んだり、美術館に行ったり、舞台芸術を見たりするたびに実感されます。作品を味わう喜びを、多くのかたと共有できたらと願っています。





My Research

感情をめぐる 心と脳、身体の関係性

心理学専攻〔准教授〕

寺澤悠理 Terasawa Yuri

専門領域：認知神経科学、神経心理学、感情神経科学
研究内容：感情を感じるための心と脳、そして身体のシステムに関心を持っています。実験心理学やfMRIを用いた脳機能画像研究の手法とあわせて、臨床場面でも感情と思考・行動との関係性を検討し、複合的な観点からの研究を行っています。

嬉しい、悲しい、腹立たしい、といった感情は、誰かとコミュニケーションをしているときでも、あるいは一人で考え事している時でも、経験することができます。目の前にある状況や、将来の予測、あるいは過去の回想、そして現実感のない空想に対してさえも、私たちは心を揺さぶられ、その感覚を感情として理解しています。

それでは、感情はどのようにして心に浮かび上がってくるのでしょうか。そして、その個人差はどこから生まれるのでしょうか。私たちの研究室では、この疑問を心と脳、そして身体の動きの関係性から理解しようと試みています。強い感情を感じた時に同時に起こる心臓や呼吸などの活動の変化は、心の動きの結果として現れるだけでなく、これらの変化を感じることも自体が、感情そのものの内容や鮮明さに影響を及ぼしている、という仮定のもと、心理学や心の動きに伴う脳活動を観察する認知神経科学の手法を用いて研究をしています。

具体的には、不安などの感情を感じやすい人や反対に自分の感情を感じづらい人は、感情に伴う身体反応の感じ方に特徴があるのか、またその特徴に関連する脳活動があるのか、といったことを調べています。このために、複数の自律神経活動を同時に計測する機械や、脳活動を観察するための機械などを使用することもあります。また、個人の感情の感じ方の特徴を質問紙や面接を用いて調べることもあります。最近では、身体反応の感じ方を変化させるトレーニングや、前述の脳活動の変化によって感情の感じ方や気分状態に変化が生じるのか、といった視点からの研究も行っています。

専門的な知識や研究手法を用いなくても私たちは、心と身体はつながっている、と直感的に信じています。この直感的な信念を、科学的な手法を用いて紐解き、心と身体の関係性についての理解を少しずつでも進めたいと考えています。





My Research

本州最北端 石灰岩洞窟における 挑戦的旧石器時代研究

民族学考古学専攻〔教授〕

渡辺丈彦 Watanabe Takehiko

専門領域：旧石器考古学、日本古代史、文化財行政学
研究内容：東北日本を中心とした旧石器時代の石材原産地遺跡や洞穴遺跡の調査・研究を通じて、過去の人々と周囲の自然環境との関わりを明らかにすることが主要な研究テーマです。さらに時代は新しくなりますが、古代瓦礫の研究を通して古代都城・官衙の成立・発展過程を考えることも研究テーマの一つです。また、遺跡の発掘調査や研究の成果を、一般の方々にわかりやすく伝えるための埋蔵文化財保護行政の仕組み作りにも関心があります。

世界的に高い水準にある日本の旧石器時代研究ですが、じつは日本最初の旧石器時代遺跡「岩宿遺跡」の発見当時から一つの大きな問題点を抱えています。それは遺跡でみつける遺物の種類が後の時代に比べてとても少ないことです。最大の理由は、列島の地表の多くが火山灰起源の土に覆われていることにあります。火山灰は酸性なので、本来あったはずの骨や木などの有機質遺物が失われ、概ね石を材料とした石器のみしか残らないのです。世界的には、石以外の素材の各種道具（骨角器等）、旧石器時代人が入手した食料（動・植物）、旧石器時代人そのもの（遺骨）なども含めて総合的な研究を行うのが一般的なので、日本の旧石器時代研究は大きなハンディキャップを負っているといえます。

しかし、この厳しい状況を覆す遺跡がないわけではありません。その一つがアルカリ質の強い石灰岩が酸性土壌を中和する石灰岩の洞窟です。その洞窟を発見すること自体容易なことではありませんが、多様な遺跡出土資料に基き総合的に旧石器文化像を明らかにすることは、避けては通れない世界的な研究の流れです。この問題を解決するため、慶應義塾大学民族学考古学研究室は、1990年代後半から石灰岩地帯における洞窟の探査とその発掘という挑戦的な研究を続けています。

この取り組みは、岩手県北上山地の石灰岩洞窟から始まり、現在は本州島最北東端下北半島の尻労安部洞窟の発掘調査を手掛けています。幸いにして、尻労安部洞窟での挑戦は大きな成果をあげ、2008年には地表下4mの位置から旧石器

が見つかり、翌年以降にはノウサギ、ヘラジカ、ヒグマなどの動物骨も続々とみつけられました。日本の旧石器時代遺跡は約1万か所ありますが、石器と動物骨が同時に出土した例は僅か5例にすぎません。この発見は、日本列島旧石器時代人の狩猟対象獣の種類を明らかにしたのみならず、その狩猟方法を具体的に考える上での大きな足跡を残しました。



My Research

言語化される「経験」と 中世ドイツの女性文学

独文学専攻〔助教〕

片山由有子 Katayama Yuko

専門領域：中世ドイツ文学、キリスト教女性神秘思想

研究内容：中世のドイツ語圏の文学を扱っています。特に女性神秘思想に関心があり、敬虔な女性たちのテキストに現れる経験と行為の構造を、哲学者であり社会学者でもあるアルフレッド・シュッツの現象学を用いて研究しています。

私が専門にしているのは中世のドイツ語圏に生きた女性たちのテキストです。中世ヨーロッパでは、女性が自分の経験や意見を書き、それを公にすることは普通のことではありませんでした。それにも関わらず、ドイツ文学史において、中世盛期から後期にあたる12-14世紀は重要な「女性の書き手」の時代です。彼女たちが書いたのは他でもない、「神との出会い」についてでした。

わたしたちは、普段意識せずとも、たくさんのことを経験しています。そして言語を通して、つまり「カフェに行った」「綺麗な夕日を見た」などと、その出来事を他者と共有することができます。もちろん完全に伝わるものではありませんが、おおよその意思疎通は可能です。しかしそれが全く言葉にしえないような出来事や感覚の経験だったらどうでしょう？



キリスト教世界において、神を直接知るという経験は、まさにそのような筆舌に尽くし難いものとされています。キリスト教において、神は言葉や概念を超えた存在であり、つまり神も、その経験も、本来は言語化されえないからです。神を経験したと考える女性たちは言葉を必死に紡ぎますが、それは決して共有されないもので、書き手も読み手もそのことは分かっていた。言語化できないもの、おそらく伝わらないもの。それにも関わらず、中世ヨーロッパでは多くの人がそれについて執筆したのです。

実際には、私たちの日々の経験だって他者に完全に伝えられるものではありません。しかし中世のこの文学ジャンルの興味深いところは、言語化できないということを強調しつつ、言葉を尽くして言語化するという点です。女性たちがもっぱらこのようなテキストのみを残したことには「女性はキリスト教義に関することに一切立ち入れない」という社会的背景が大きく関わっています。しかし同時に、神という語り得ないものを語り、またそれが語られることを求めるという、女性たちを取り巻く大きなムーブメントがあったことも確かです。

私は、特殊ともいえるこのような文学を媒介に、人が読むこと・書くこと、そして文学と社会との関係にフォーカスをあてた研究をしています。



My Research

精神の歩みを 主題とする作品の研究

仏文学専攻 [助教]

大島健太郎 Ooshima Kentaro

専門領域：近代フランス文学（マルセル・ブルースト）

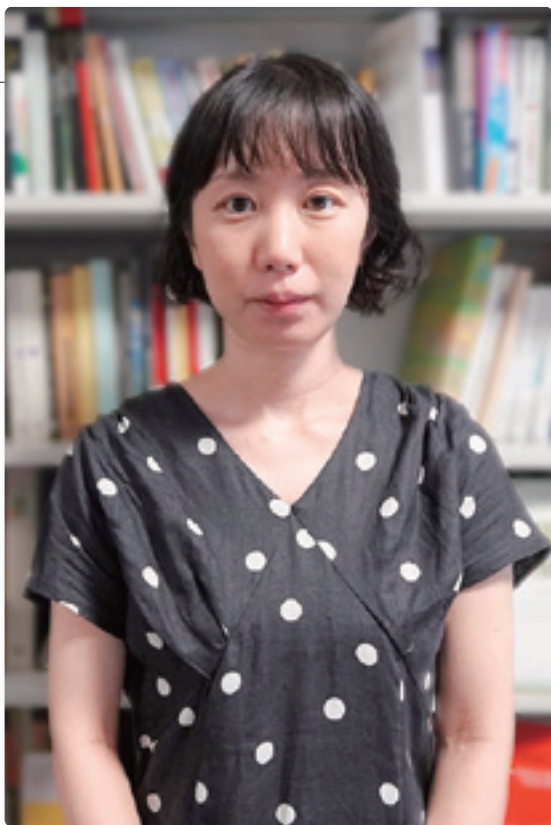
研究内容：主にはマルセル・ブルーストを研究テーマとしています。他方で、ブルーストと、周辺の作家たち（ブルジェやジッドなど）との比較研究を通して、当時の文学者たちにとって“読まれること”とは何を意味し、読者とはいかなる存在であったのかという問題について考察しています。

わたしは、学生時代から今日まで一貫して、20世紀フランスの小説家、マルセル・ブルーストを研究してまいりました。『失われた時を求めて』という長大な作品により、スタンダールやバルザックにはじまった近代小説を完成させるとともに、その後の20世紀の実験的小説を予告するという偉大な功績を遺した作家です。どこともわからない寝室で不眠に苦しむ中年男性が、曖昧模糊とした意識のなかで自分の過去を回想することから始まるこの作品はしかし、これと言った明瞭なプロットや特定のテーマを持つ作品ではありません。パリ社交界への憧れと幻滅、海辺のリゾート地で知り合った魅力的な少女との恋などを経て、ついにはそうした無為の生活から脱却し、これまでの自身の生を芸術作品として昇華させようと決意するまでの、主人公の精神の軌跡そのものが主題と言えるでしょう。

わたしの最近の関心は、いわゆるベルエポックの文学状況におけるブルースト作品の文学史的意義を十分に理解すべく、これまであまり比較されることのなかった同時代の作家や、当時のフランスの文壇が関心を寄せていた外国文学と関連づけてブルーストを考察することにあります。例えば、ブルーストによる写実主義批判はこれまで、ひとつの小説美学上の革新と考えられてきました。他方で、無為と情念の生活を超克して創造者となるという『失われた時を求めて』の展開は、読者に生の浄化を促すという倫理的な意義を担っているとも言え、このことは、当時のフランスの作家たちが切り開こうとしていた小説の新たな可能性、方向性のひとつとして評価されるべきではないかとおもいます。

優れた批評家でもあるブルーストは、文学のみならず芸術一般を享受することとは、新たな眼をもって世界を見つめなおす

ひとつの旅である、という主旨のことを述べています。要は、ある作品を受け入れるとは、それを創った芸術家の世界観を内面化することですが、さらに大切なのは、そこから先の作業にあります。学び取った新たなヴィジョンで人生や世界を見つめなおし、これまで気づいてこなかった新たな真実を自ら発見することこそ、芸術を享受することの本当の意義だと言えるでしょう。文学部とは、このような知的営為をより科学的に、実証的に行いながら、揺るぎなくもしなやかな批判精神を体得するための場であると信じています。



My Research

少数言語で紡ぎ出された文学を研究・翻訳する

諸言語部門〔助教〕

金子奈美 Kaneko Nami

専門領域：スペイン語圏の文学・文化、バスク語文学

研究内容：スペイン北部とフランス南西部にまたがるバスクと呼ばれる地域の固有語、バスク語で書かれた文学を研究、翻訳しています。バスク語は、スペイン語やフランス語に対して少数言語の地位にあり、かつては消滅も危惧されていましたが、20世紀後半から急速な復興を遂げ、それとともにバスク語による現代文学が大きく発展しました。そのバスク語文学の発展のプロセスを、ベルナルド・アチャガを中心とした現代作家たちの研究を通じて明らかにしようとしています。その関係で、バスクのような複数言語地域や少数言語の文学におけるバイリンガリズム、翻訳（特に自己翻訳）、世界文学といったテーマにも関心を持っています。

私が専門とするのは、スペイン北部とフランス南西部に跨るバスク地方で話される、バスク語という少数言語で書かれた文学の研究・翻訳です。といっても、ほとんどの人は「バスク語って何？ そもそもそんな文学があるの？」と驚かれることと思います。私自身、ある本に出会うまでは、バスク語文学というものが存在することすら知りませんでした。

ベルナルド・アチャガという作家の連作短篇集『オババコアック』（1988年刊、邦訳2004年刊）は、世界の約30言語に翻訳され、バスク語文学の存在を初めて国際的に知らしめた作品です。私はスペイン語専攻の大学1年生だった頃に、偶然この本の日本語訳を読み、すっかり魅了されてしまいました。そしてふと、日本語訳が原語のバスク語からでなく、スペイン語からの重訳であることが気になりました。「もしもバスク語で読むことができれば、この作品の世界に少しでも近づけるだろうか？」そう考えたことが、バスク語を学び、バスク語文学について調べ始めたきっかけです。

あとから知ったことですが、バスク語は、スペイン語とフランス語という大言語の狭間で衰退の一途を辿っていたものの、20世紀後半にめざましい復興を遂げ、世界文学の舞台にまで台頭した現代文学を持つという、地球上の何千もの少数言語——その多くは話者を減らし続け、消滅の危機にある——の文脈で見てもかなり珍しいケースでした。そして『オババコアック』の作者アチャガは、バスク語現代文学の勃興における中心人物だったのです。そのことに興味を惹かれて以来、バスク語文学がいかにして今日の状況まで発展するに至ったのか、そしてバスク語のような少数言語で書くというのはどういうことなのかを明らかにすべく、研究活動を行なっています。

そのなかで特に重視してきたのが、複数言語性と翻訳という観点です。バスクでは、平均して人口の約3分の2を占める人々が、バスク語を理解しないスペイン語またはフランス語の話者なので、バスク語が社会のあらゆる場面で使われているわけではありません。そのため、少数派であるバスク語話者は日常的に2言語使用を強いられており、そこにはきわめて非対称な関係が存在します。バスク語文学は、そのような複数言語環境と

非対称な言語的・社会的関係を背景に持つわけなのですが、このことは当然ながら、創作プロセスや書かれた作品そのものの、さらには作品が受容され、他の言語へ翻訳される方法にも強く影響します。

私は、バスク語の知識を活かしつつ、2000年代頃から活発化した世界文学論や翻訳研究の成果を踏まえることで、そうした複雑さを解きほぐしながら、バスク語文学の実相に内外両方の視点から迫ろうとしています。バスク語文学の研究者は日本では私1人だけで、世界的に見ても、スペイン語（やフランス語）への翻訳を通してでなく、原語のバスク語で分析することのできる研究者はきわめて稀なので、その立場を活かした研究を展開していければと考えています。

そして研究の一環として、私が力を注いできたのがバスク語文学の翻訳です。これまでに、アチャガの小説『アコーディオン弾きの息子』や、キルメン・ウリベなど他の作家の作品をいくつかバスク語から日本語に翻訳し、日本とバスクの両方で翻訳賞を頂く機会にも恵まれました。日吉キャンパスで持ち回りで担当している「文学」や、三田キャンパスで開講している「スペイン語圏文化研究」といった授業では、私の翻訳したバスク語文学作品を含め、スペイン語圏のさまざまな地域・言語の文化を紹介しているので、言語や文化について視野を広げたい人はぜひ覗きにきてください。



スペイン・バスク自治州
ドノスティア=サンセバスティアン市内の書店にて。
バスク語とスペイン語の本が並び、
掲示も2言語で書かれている。



My Research

日本語の文字から 文字の変化要因を探る

国文学専攻〔准教授〕

岡田一祐 Okada Kazuhiro

専門領域：日本語文字・表記史、デジタル人文学

研究内容：文字・表記体系の変遷について興味を持ち、とくに近代以降の変化に着目しています。デジタル技術の研究活用についても関心を持っており、それにまつわる研究もしています。

国文学専攻というところで日本語学を担当しています。日本語を研究しているというと、「間違っていないかチェックされてしまう」と言われがちなのですが、現代の多くの日本語研究者は日本語の番人を務めるべく研究しているわけではないので、怖がらないでほしいと思います。

では日本語研究者はなにをしている人々なのか。日本語を研究するということは共通点となるわけですが、その対象や迫り方となると多彩で、現代標準語や有名な古典作品の言語の研究を対象にする人ももちろん多いのですが、記録以前のことばのありさまを復元したり、いまさに消えつつあることば（死語や継承者の途絶えた方言）やあらたに生まれ行くことば（さまざまな地域での新語、新しい文法）の記録に取り組んだりする人もいます。細かな差はあれど、日本語にかかわる事実と仕組みの記録と解明が仕事でしょうか。

そういうおまへはどんなのだといえ、現代日本語を中心にその仕組みを幅広く教えつつ、「日本語を書き表すためにもっとも幅広く日本語を母語とする人々に用いられている文字」（以下、かんたんに日本語の文字と呼びます）の変化を研究しています。とりわけ、19世紀における文字の変容に興味を持ってきました。19世紀は、ナポレオンがヨーロッパを席卷したり、太平天国の乱があったり、パリ万博があったりした世紀です。日本では、蝦夷奉行設置、文政の改革、明治維新、大日本帝国憲法公布と世界の動きに応じた変化がありました。日本語の文字も、かなりおおざっぱに言えば、候文・行草書体（読めない文字としてのいわゆる「くずし字」）からデアル体・楷書体へと変化します。なお、文体は文字とは直接は関わらないものの、なんのために書くものかということは文字の選択に大きく関わることなので含めてあります。博士論文では、その移行の中で、1900年に平仮名の種類が現在のものに統一され、それ以外が変体仮名として排除されたという現象を研究しました。

こんなさいきんのことに未解明のことがらがあるのかともしかしたら驚かれるかもしれませんが、なぜいまの平仮名が選ばれたのかといったことがらも十分に検討されてきたとはいええない状況でした。日本では公的な記録が大事にされないことが多いので、

経過を事細かに辿ることが難しいという事情もあり、どのような議論を経て意思決定されたのかもはやあきらかにできません。とはいえ、いままで注目されてこなかった明治期の民間教科書にたいする文字統制に着目することで、これまで見落とされてきた現場における実践に光を当て、その変化をすくい取ることに成功しました（『近代平仮名体系の成立』と題して2021年に出版されています）。

このようなことはあくまである一時期の現象にすぎませんが、それまで安定していた文字に変化が起き、それがふたたび（なにごとにもなかったかのように！）安定するということはきわめて驚くべきことのように思えます。世界の文字に目を向けるまでもなく、日本語の仮名は漢字が導入されて、それを流用して日本語を書き表していたものが、あるとき形状的自立性を獲得して前近代の仮名となったものですし、漢字にも、アルファベットたちにも悠久の変化の歴史があります。

もちろん、個々の文字に起こった変化をまとめあげるのは膨大な成果がありますが、では、じっさいのところ、このようなことにどのような人類的背景があるのかという研究はあんがいにないようです。書の美に心打たれることがないわけではないのですが、なにが一番か論じ合うことよりも、興味が強いのはこういう方面のようで、仮名や行草体漢字の研究がかならずや文字変化の一般理論の具体化に貢献すると信じて、いまは研究を進めています。



明治時代に日本に入ってきた活版印刷も
日本の文字の変化に大きく関わっている

Alumni Voice



細田ひかりさん

読売新聞グループ本社
社長室文化芸術企画部
国文学専攻
(2017年度卒業)

大きな問いにじっくり 向き合える時間

— 現在のお仕事は？

私は新聞記者ではなく、イベントの仕事をしています。採用された事業局では、スポーツや美術のほか、コンサートからお芝居や落語のような伝統芸能まで、幅広く主催をしています。(※現在は事業局から出向中)

— 文学部での学びが仕事に役立つ瞬間は？

文学部の授業はあらゆる面で役に立っています。この仕事では、色々な方と接する機会が多いので、美術や文学、

語学の知識や素養があるに越したことはありません。「それ、知っています」「授業で読んだことがあります」と言えるだけで、話に花が咲き、信頼してもらえるようになります。

— 慶應義塾大学文学部の魅力とは？

17も専攻があり幅広いです。2年目から専攻を選べるため、1年目で仲が良く、各専攻に分かれていった人たちと久しぶりに会うと、強みの異なる人が集う“アベンジャーズ”のように感じます。そうした楽しいコミュニティが自然と自分の周りにできていて、自分もその一員であるというのは、とても面白いです。

— 就職活動での文学部のメリットは？

カルチャーが好きな人が多いので、文学部生がよく行きたいと思う、広告、マスコミ、出版業界などを一緒に目指す仲間がいます。就職されているOBやOGの先輩も多いというのは、具体的なメリットだと思います。

— 文学部への進学を検討している方へ

文学部の4年間は、外国語が上達するとか、難しい本を読むとか、そうした勉強と同時に、「人間とは」「世界とは」といった大きな問いにじっくり向き合える時間です。後悔しないと思いますので、文学部にぜひ進学してみてください。

— 現在のお仕事は？

Cygamesでゲームマスターチームとして、リリースされているアプリの不正対策や分析を中心に業務を行っています。

— 文学部での学びが仕事に役立つ瞬間は？

文学部での学びが役に立ったと思うのは、上司への報告とか、会議のまとめとか、いろいろな場面で文章化を求められる時です。文学、社会学、心理学といった様々な分野での学びや、課題に取り組むことで得た文章構成力が、社会に出て、とても役に立っています。

— 慶應義塾大学文学部を選んだのは？

1年生の時は、総合教育科目として、数学、心理学、社会学など、いろいろな学問を学ぶことができます。専攻を選択するまでの1年間で、自分が本当に興味のある学問が何かを考えることができる。それがとても魅力に感じて、文学部を選びました。

— 就職活動での文学部のメリットは？

大学時代に一番やってきたことを聞かれますが、自分はやってきた研究をそのまま話して、評価されました。自分の好きを煮詰めた研究が文学部でできたこと、それを評価してもらえる文章力で書けたこと、それは文学部でしかできない経験だと思いますし、文学部で良かったと思っています。

文学部でしか できない経験

リョウさん

株式会社Cygames
英米文学専攻
(2020年度卒業)



— 文学部への進学を検討している方へ

「文学なんて将来性ないな」とは思ってほしくありません。実学を学ぶことは重要ですが、人間は何を考えたのか、どういう文化を培ってきたのか、どういう思想のもとで社会を形成してきたのか、それを知ることができるのが文学部です。それを踏まえて社会の一員として活躍できる人材になるという意味でも、文学部でできるような学びをしてほしいと思います。

山岡香央さん

株式会社ファンケル
総合研究所
心理学専攻
(2004年度卒業)

幅広い知識を 得ることができる



— 現在のお仕事は？

私が所属している研究部門では、サプリメントや食品の有用性や機能性について、人を対象とした臨床試験を行っていて、機能性表示食品の届け出の際に使用するエビデンスなどを収集し報告することをメインの業務にしています。

— 文学部での学びが仕事に役立つ瞬間は？

研究所は理系の方が多くて、文系は私だけですが、心理学専攻で学んだロジカルシンキングや研究姿勢、1年次に

学んだ幅広い知識などがベースとなって、今の業務に直接的に繋がっています。また、慶應義塾大学で培った人間関係が財産になって、今の私があると思っています。

— 慶應義塾大学文学部を選んだのは？

もともと、高校生の頃から心理学に興味があり、最初から心理学専攻に入るつもりで受験しましたが、特に慶應義塾大学の文学部に魅力を感じた点としては、1年次に幅広い知識を習得して、新たなスタンスで次のステップに進むことができる、というところですね。文学部は、心理学専攻だけでなく、門戸が広いので、1年次に幅広い知識を得ることができるのは、大きなメリットだと思います。

— 文学部への進学を検討している方へ

まずは1年次に、知識を絞らず、いろいろなことにチャレンジすることです。勉学とか、人間関係とか、それ以外の活動でも、遊びのある1年という時間はとても重要です。そのうえで選択した専攻での気持ちも強くなります。そういう考え方をもってれば、1年次で得た知識や経験は、とても役に立つと思います。2年、3年、4年、就職活動とか、卒業してからも、アカデミアに進んでも、いい形で皆さんの支えになります。

— 現在のお仕事は？

文化庁政策課で、まさに日本中の文化行政に携わる仕事をしています。漫画やアニメから、文化財や著作権や日本語まで、私たちの身近にある文化に関わるものに広く関わっている部署です。

— 文学部での学びが仕事に役立つ瞬間は？

もともと学芸員に興味があったことで、文学部では学芸員の授業を取っていました。様々な博物館や美術館に足を運んで、どのような人たちがどのような作品をどのような表情で見ているかを研究したこともありました。そのことが、社会人になって、仕事として博物館や美術館の行政を考える際に、参考になっています。

— 就職活動での文学部のメリットは？

就職活動では、自分が社会にどう関わっていきたいのか、社会をどう変えていきたいのかということも問われると思いました。文学部では、社会学や人間科学を通して、人の動きや社会の動きを学ぶことができ、就職活動で、自分の体験したことや自分の感じていることがどういう理由で起きているのかをそのような観点から学問的に説明することができたと思っています。

人の動きや 社会の動きを 学ぶ

石井里奈さん

文化庁 政策課企画係
人間科学専攻
(2021年度卒業)



— 文学部への進学を検討している方へ

慶應義塾大学文学部では、1年目で自分のしたいことが決まっていなくても、様々なことを勉強することができます。私は2年生で人間科学専攻に進んでからも、心理学の授業を受けることができました。慶應義塾大学文学部では、自分がどの専攻に進んでも、好きなことを学ぶことができます。その意味で、文学部には、幅広い学びの場が存在しています。皆さんもぜひ文学部に来ていただければ、卒業生として嬉しいです。

Philosophy

哲学

幅広い領域を 普遍的な視点から研究

哲学は人類最古の学問のひとつです。しかし、実は哲学のその「古さ」は、つねに「新しさ」をも含んでいます。なぜなら、哲学をするとは、この世界に生きる誰もが感じ、多少とも疑問に思っているような事柄を、もう少し厳密にそして首尾一貫して考えてみようとする、人間の普遍的な衝動の発露にほかならないからです。つまり、哲学は普遍的であるからこそ、歴史的には他の学問に先んじて生じながらも、けっして古くさくなくなることなく、私たちにとってつねに新しくあり続けるのです。

哲学のこの古さと新しさ——哲学の普遍性——を体現するのが、まさに本専攻であると言えます。本専攻の伝統的な特徴は、最も古きものと最も新しきもの、つまり古典と現代という二極に教育・研究の軸を置きながら、普遍的な哲学的問題をめぐって両極が相互の理解と協力へと開かれているという点にあります。一方の、古代哲学から中世哲学までの古典研究においては、ギリシア語、ラテン語が飛び交い、哲学の原点にある諸問題が議論されながらも、現代の哲学的状況にとっての意義がつねに問題とされます。他方の、20世紀以降の現代哲学研究においても、論理学、分析哲学、科学哲学、現象学それぞれの最先端課題が追究されながら、他方ではつねにその哲学的意義、つまり哲学的な根本性が、古典研究に照らして問い質されているのです。



アリストテレス『著作集』
(ヴェネツィア：1477年刊)



「ドゥッス・スコトゥス『任意討論集』」
(ヴェネツィア：1495-1498年刊)

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	荒畑 靖宏	教授	現代ドイツ語圏の哲学、哲学的論理学
	上枝 美典	教授	西洋中世哲学
	柏端 達也	教授	行為論、現代形而上学
	近藤 智彦	教授	古代ギリシア・ローマ哲学、西洋古典学
	田中 泉吏	准教授	科学哲学
	平井 靖史	教授	時間と心の哲学、記憶の形而上学、 ベルクソンおよびライブニッツを中心とする近現代哲学
	峯島 宏次	准教授	言語哲学、論理学、意味論・語用論

Ethics

倫理学

思想を通して 「人間の生き方」を考える

倫理学は、「人はどう生きるべきか」を問おうとする学問です。グローバル化の著しい進展により従来の価値観が揺らぐ現代において、誰もこの問いを避けて生きることはできません。倫理学専攻では、この問いに答えるためのさまざまな理論的枠組み（義務論や功利主義、正義論、徳倫理学、自然法論、メタ倫理学など）を学び、倫理学の一次文献を自ら読み解く技術を身につけることができます。

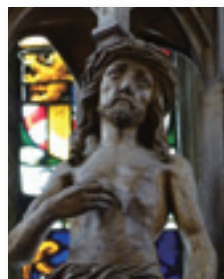
慶應義塾の倫理学専攻には6人の専任教員がいます。伝統的に、近現代のドイツ・フランス・イギリスの倫理思想とその歴史を専門領域とする教員が多いのですが、それ以外の領域についても多くの科目を開講し、学生の幅広い関心に対応しています。現代の社会問題を問い直す応用倫理学（生命倫理学や環境倫理学、情報倫理、ビジネス・エシックス、グローバル・エシックスなど）や、キリスト教を中心とした宗教思想、法・政治思想の研究や教育にも力を入れています。



アテナイの学堂



フランス人権宣言



イエス像

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	荒谷 大輔	教授	哲学、倫理学
	石田 京子	教授	ドイツ倫理思想、法哲学
	エアトル, ヴォルフガング	教授	倫理学史、形而上学、現代倫理学
	圓増 文	准教授	生命倫理、医療倫理
	柘植 尚則	教授	イギリス倫理思想史
	村上 暁子	助教	現代フランス思想・実存思想と宗教思想

美学美術史学

古代から現代まで 古今東西の「美」を学ぶ

美学・芸術学、美術史学、音楽学、ならびにアート・マネジメントを主要な研究領域とします。美学・芸術学とは、主に芸術一般における制作・作品理解をめぐる諸問題を理論的に考察する学問です。概論や各論のほか、近現代の諸芸術メディアにみられる様々な問題が扱われます。美術史学とは、西洋および日本・東洋の各時代における絵画、彫刻、工芸、建築等の実証的・歴史的研究を行うものです。美術の通史をとりあげる概説と、国や時代別の多様な美術を扱う各論の講義があります。音楽学は、作曲家とその作品、それらを取り巻く様々な事象を歴史的・理論的に研究する学問です。西洋音楽の概説と各論のほか、日本の近現代音楽や伝統音楽に関する講義も開講されています。アート・マネジメント分野では、芸術組織の経営の問題のほか、文化政策、文化経済学、非営利組織論についても学習します。

以上の専門研究の基盤として、芸術研究基礎・演習、原典講読などの入門講義が用意されています。なお、3・4年生は研究会に所属し、卒業論文の作成指導を受けることが必須です。



金山ゼミの様子



日本美術作品の調査実習



美美旅行

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	青野 純子	教授	西洋美術史
	金山 弘昌	教授	西洋美術史
	後藤 文子	教授	西洋美術史
	佐々木康之	准教授	日本美術史
	内藤 正人	教授	日本美術史
	中尾 知彦	教授	アーツ・マネジメント
	西川 尚生	教授	音楽学、西洋音楽史
	福田 弥	教授	音楽学、西洋音楽史
	望月 典子	教授	西洋美術史、芸術学

Japanese History

日本史学

日本史を通じて 人間の営みと社会の動きを考える

日本史学専攻では、歴史学を中心として広くさまざまな分野の学問の方法を学びつつ、通時代的な歴史像の把握に向けて日本史全般に関する知識の修得に努めます。また、史料から歴史情報を引き出すための基礎的能力を養うとともに、その成果を論理的に構成して発表することができる能力を磨きます。

日本の歴史に対する理解を通じて培った、人間の営みと社会の動きに対する視野と洞察力を併せ持つことで、社会人、研究者、教育者として、社会に対する独自の貢献ができる人物を育成します。

日本史学専攻には、古代から近代まで、合わせて7人の専任教員がおり、キリシタン史を含め特色のある研究・教育を行っています。学生は古い時代から新しい時代まで、また方法論的にも多面的に学習することができます。



京都・二条家の簿冊の山



資料整理の様子



秋田藩城内での百姓の酒宴

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	浅見 雅一	教授	キリシタン史、中国天主教史
	上野 大輔	准教授	日本近世史
	小山 幸伸	教授	近世・近代日本の社会経済史
	十川 陽一	准教授	日本古代史
	中島 圭一	教授	日本中世史
	藤本 誠	准教授	日本古代史
	前田 廉孝	准教授	クリオメトリクス(計量経済史)、近代経済史・経営史、日本植民地経済史

Asian History

東洋史学

アジア、中東・イスラーム世界を歴史的に捉える

東洋史学専攻では、アジアおよびイスラーム世界を中心とする地域の政治・経済・社会・文化および国際関係を歴史的に捉えて、人々の多様な価値観を理解する力を養います。この地域に関するユニークなテーマを見つけて、学術的な研究文献や一次資料を読み解き、論理的に考察して表現することを目指しています。

アジア・イスラーム世界や歴史学に対する興味を多様な進路につなげていくことができますが、在学中に培った外国語の能力を活かして、国際社会で活躍したり、国際交流の分野に貢献したりする道も開かれています。

東洋史学専攻には、中東・イスラーム世界および東アジアを専門とする5人の専任教員がおりますが、そのほかの地域に関する授業も豊富に設置されており、また近現代・近世・中世・古代のいずれの時代も専門的に勉強することができます。



イスタンブールのスレイマニエ・モスク



エジプト最南端の町アスワンで
ナイル川を臨む



上海の洋食レストラン・徳大西菜社
(1897年創業)

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	岩間 一弘	教授	東アジア近現代史、食の文化交流史、中国都市史
	勝沼 聡	准教授	近現代中東社会史、アラブ近現代史
	五味 知子	准教授	明清社会史、中国ジェンダー史
	長谷部史彦	教授	中近世中東社会史、アラブ都市史、地中海交流史
	藤木 健二	教授	オスマン帝国史、中東都市社会史

西洋史学

現代の「国際社会」を構成する 多様な価値観を理解する

古代から現代までのヨーロッパやアメリカなどいわゆる西洋世界と、そこから強く影響を受けた地域の過去を学ぶことを通して、現代の「国際社会」を構成する多様な価値観を理解する力を持った社会人、教育者、研究者を育成します。そのために、自ら情報を収集し、それを学問的に分析するために必要な外国語力と、学問の方法論を身につけることに重点を置いています。

外国語の習得には特に力を入れており、2年次と3年次の必修科目において、英語と、英語以外のヨーロッパ言語で専門書を読む力を鍛えます。また、3年次から2年間連続して履修するゼミと、卒業論文の執筆を通して、語学力と方法論を実践的に運用し、主体的に資料を集め、理論的に考察し、論文にまとめあげる総合力を身につけられるように指導します。

多様な地域や時代を専門とする専任教員の存在に加え、幅広いテーマを対象とした非常勤講師による授業も数多く開講しており、多様な地域の歴史や文化を学ぶことができるのも特徴です。



スペイン内戦の弾痕が残る教会



南仏ニームのメゾン・カレ



18世紀の手稿史料

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	赤江 雄一	教授	西洋中世史
	清水 明子	教授	ドイツ現代史・ユーゴスラヴィア史
	舘 葉月	准教授	フランス現代史、国際関係史
	野々瀬 浩司	教授	スイス宗教改革史、農村社会史
	長谷川 敬	准教授	古代ローマ史(社会経済史)
	山道 佳子	教授	スペイン(カタルーニャ)近代史

Archaeology and Ethnology

民族学考古学

文献のみならず多様なモノを 資料に歴史を研究

文献のみならず、多様なモノを資料に歴史を研究する専攻です。現在、専攻が所蔵する資料・標本類は国宝や重要文化財も含めて20万点以上。それらは大正期より幾多の発掘・民族調査が重ねられた結果、収集されたものです。専攻生はそれら貴重な資料を研究対象とし、専任教員が国内外で展開する調査に参加することもできます。フィールドワークを重視し、また扱う地域・時代に制限を設けない当専攻には、考古学・民族学・人類学の概論科目や調査に必要な方法論・技術を学ぶ科目、日本、アジア、オセアニア、オリエント、ヨーロッパに至る多様な地域を扱う民族学・考古学の専門科目など多岐に亘る科目が設置されています。専任教員を通して、言語文化、建築史、生態学、文化人類学といった関連領域との幅広い連携も経験できます。これらの科目や経験から多様な知識を得、フィールドワークで観察力と対話力を養い、また研究会で発表を重ね、卒業論文を仕上げる中、社会人に等しく必要な論理的思考力とプレゼンテーション能力も習得します。



展示実習の様子



発掘調査（尻労安部洞窟）



ウリ像（ニューアイルランド島）

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	安藤 広道	教授	日本考古学・博物館学
	佐藤 孝雄	教授	動物考古学、民族考古学
	志村 真幸	准教授（有期）	比較文化、民俗学、南方熊楠研究
	三木 健裕	准教授	西アジア・南アジア地域の考古学
	山口 徹	教授	オセアニア島嶼世界のジオ考古学、歴史人類学、博物館人類学
	渡辺 丈彦	教授	旧石器考古学、日本古代史、文化財行政学

国文学

言語、文芸をはじめ 日本の文化全般が研究対象

国文学専攻は、国文学および日本語学を中心に、学芸、習俗など広く日本文化の歴史と現在について専門的に学ぶ専攻です。

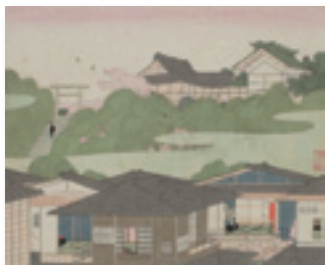
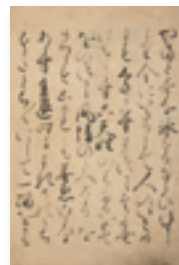
本学国文学専攻の文学研究の一大特色は、書誌学などを基礎とする実証的で厳密な研究方法にあります。日本語についてもその言語としての諸側面を理論的・体系的・実証的に学ぶことができます。

そうした学問的な厳格さは保ちながらも、自由な雰囲気のもと固定観念や偏見にとらわれない柔軟な見方で、広く学び深く考えてゆこうというのが、本学国文学専攻の伝統的な雰囲気です。

単なる物知りではなく、みずからの問題意識に基づいてテーマを設定した上で、独力でデータ・資料を収集し、論理的な分析・考察を行って課題を解決して、自分のことばで発表できる人材の養成を目指しています。そうした能力を社会に出てから直面する多様な問題・課題を解決するために活用でき、生涯、学習を継続する姿勢を保つ、自立した責任ある社会人・教育者・研究者を育成してゆくことが本専攻の目標です。



やひやう糸ねすみ(弥兵衛鼠)



小村雪岱画稿



後鳥羽院御口伝

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	岡田 一祐	准教授	日本語文字・表記史、デジタル人文学
	小川 剛生	教授	中世文学、和歌文学
	小平麻衣子	教授	近代日本文学
	恋田 知子	教授	中世文学
	合山林太郎	教授	日本漢文学(近世・近代)
	新沢 典子	教授	古代文学、万葉集

中国文学

中国の伝統的文化を学び 現代中国の動向にも向き合う

中国文学専攻では、日本に大きな影響を与えた中国の伝統的文化を学ぶと同時に、現代中国の動向にも向き合う姿勢を重視しています。

「中国語学」「現代文学」「古典文学」を三本柱としつつも、いわゆる「文学」の枠組みにとらわれず、歴史・思想・芸能などを含むあらゆるジャンルを研究の対象としています。近年では台湾を含めた現代社会や映画・サブカルチャーを研究対象にする学生も増えています。

様々な研究や活動のためには、現代中国語のスキル向上が必須です。そのために、各学年に文法・読解中心の科目と、ネイティブ教員によるコミュニケーション重視の科目を設置し、効率的なカリキュラムを構築しています。

欧米とは異なるスタンダードを有する中国と向き合うことで、世界を見つめ、日本のあり方をも見つめる新たな視座を獲得できるはずです。中国文学専攻では、古典から現代まで時代・分野を問わず、躍動する中国に関心を持つ学生を歓迎します。



敦煌・莫高窟



四庫全書

李白

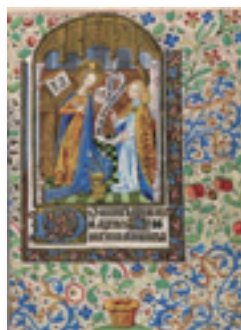
スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	浅野 雅樹	教授	中国語学
	杉野 元子	教授	中国近現代文学、日中比較文学
	須山 哲治	准教授	中国古典文学
	丁 雷	准教授	中国語教育、音声学(中国語)、中国語学
	松倉 梨恵	助教	中国現代文学
	吉永 壮介	教授	中国古典文学

英米文学

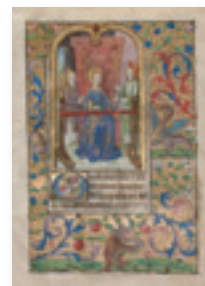
英米の文化・言語を 幅広く学ぶ

英米文学専攻の扱う領域は、英語という言語自体から英語によって築かれた文化一般にいたるまで広範囲におよびます。英語運用力といった基礎的な技能は、言語や文化をより深く理解するための一手段として位置づけられることになります。

当専攻では、戦前から野口米次郎（イサム・ノグチの父）、戸川秋骨、西脇順三郎（ノーベル文学賞候補）、厨川文夫といった先達によりアカデミズムを重視する学統がつつかわれてきました。この伝統を受け、現在も学生の広く深い関心に対応できるよう、種々の教授陣および多岐にわたる講義を用意しています。中世から現代にいたる英文学に関する講義・演習、植民地文学からポストモダン文学にいたる米文学に関する講義・演習、古英語から現代の言語学研究にいたる英語学に関する講義・演習、さらに映画や音楽などの欧米文化と文学との接点を多角的に取り上げた学際的講義など、日本でも類を見ないほどの充実したカリキュラムによって、学生の興味はさらに広がっていくと確信しています。



受胎告知
(15世紀後半制作写本の細密画)



機を織る聖母マリア
(15世紀制作写本細密画)

博物館の芸術家（チャールズ・W・ピール）

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	井口 篤	教授	中世英文学 (14・15世紀のラテン語・中英語宗教散文)
	井上 逸兵衛	教授	社会言語学、英語学、談話分析、 言語学コミュニケーター
	大串 尚代	教授	アメリカ文学、ジェンダー研究
	大鳥由香子	准教授	歴史学、アメリカ研究、子どもの歴史、 リーガル・ヒストリー 法と人文学
	加藤有佳織	准教授	アメリカ文学、カナダ文学
	コミサロフ、 アダム	教授	異文化コミュニケーション、 異文化適応
	坂本 光	教授	近現代イギリス文学
	佐藤 光重	教授	アメリカ文学
	高橋 勇	教授	近現代イギリス詩・文学、 ファンタジー文学
	氏名	職位	専門領域
	高橋 宣也	教授	近代イギリス文学
	辻 秀雄	教授	アメリカ文学
	徳永 聡子	教授	中世イギリス文学、書物史、書誌学
	橋本 良一	助教	近現代イギリス文学、詩と詩学
	バナード、 ピーター	准教授	日本近代文学、比較文学、 幻想文学、ゴシック論
	原田 範行	教授	近現代イギリス文学、比較文学、 出版文化史、文学教育論
	細野 香里	助教	19世紀アメリカ文学・文化
	堀田 隆一	教授	英語史、歴史言語学
	若澤 佑典	准教授	18世紀イギリスの文学・文化、 スコットランド啓蒙思想、 会話／対話としての哲学

独文学

ドイツ語圏の文化を 領域横断的に研究

独文学専攻の対象は「ドイツ」にも「文学」にも限定されません。ドイツ、オーストリア、スイスの言語と文学を中心に、映像、舞台、美術、音楽、思想、歴史、政治、建築、メディアなど、ドイツ語圏の豊穡な文化全般を扱うのが当専攻なのです。

独文学専攻のカリキュラムは、ドイツ語母語話者2名を含む9名のスタッフのもとで、ドイツ語運用の四技能(「読み」・「書き」・「聴く」・「話す」)がバランスよく修得できるよう設計されています。学生は、そのスキルを駆使してドイツ語圏の文化を広く、また深く学び、4年次にはその中から関心のあるテーマを選んで探究し卒業論文に結実させます。在学中に留学をする学生も少なくありません。

独文学専攻の淵源は、慶應義塾ではじめて「独文学」が講じられた1910年に溯ります。以来、当専攻は意欲と知的好奇心に富む学生たちを迎えてきました。教員と大学院生や学部生の間関係が密で、コンパや合宿や読書会など、交流の機会が豊かであることを良き伝統の一つです。卒業生たちの進路はドイツ語圏の知識を生かす職種の他、通信、出版、製造、金融、ITなど社会の広い分野に開かれています。



フリッツ・ラング『メトロポリス』



ブレーメンの音楽隊

ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ

スタッフ紹介

氏 名	職 位	専 門 領 域
片山由有子	助 教	中世ドイツ文学、キリスト教女性神秘思想
川島建太郎	教 授	現代ドイツ文学・思想、メディア理論
糸川麻里生	教 授	近現代ドイツ文学、文化史、スポーツ史、ポピュラー音楽、怪獣映画
佐藤 恵	准教授	歴史語用論、ドイツ語史
田中 慎	教 授	ドイツ言語学、言語理論
西尾 宇広	准教授	近代ドイツ文学
平田栄一郎	教 授	演劇学・ドイツ演劇
ベッカー、アンドレアス	訪問准教授(招聘)	映画、メディア学
ヨッホ、マルクス	教 授	近現代ドイツ文学・文化学

仏文学

広汎なフランス語文化研究を きめ細やかに指導

仏文学専攻では、フランス語およびフランス文化を通じて、学生諸君が社会的・文化的事象を多角的にとらえる能力と、高度で実践的な語学力を身に着けることを目指しています。

フランス滞在を終えた永井荷風が慶應義塾に就任し、私たちの専攻が実質的に誕生したのは1910年のことでした。以来百年以上にわたって、文学・芸術の分野にとどまらず、メディア、通信、実業界など、さまざまな世界で活躍する人材を輩出しています。

当初は小さな組織だった本専攻も、現在では、さまざまな分野や時代をカバーする10名以上の専任スタッフを揃えるに至りました。狭い意味でのフランス語学・文学の領域にとどまらず、思想、社会、歴史、食文化やモード、映画や舞台芸術、美術、音楽、ネット時代のメディア等、学生諸君の幅広い関心に応えられる組織となっています。

在学中に留学する学生が多いのも私たちの専攻の特徴です。慶應義塾では高等師範学校、パリ第3大学など数多いフランスの大学、さらにスイスのジュネーヴ大学、カナダのモントリオール大学などと交換協定をもっており、当専攻からは特に多くの在学生がこれらの留学制度を利用しています。



専攻の大先輩、遠藤周作の学んだフランスの古都リヨン



知の集大成、
フランス国立図書館



ノルマンディ地方カーン近郊にある
現代出版記憶研究所 (IMEC)

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	芦野 文武	准教授	発話意味論、語彙意味論（フランス語、日本語）
	市川 崇	教授	現代フランス文学及び思想
	上杉 誠	助教	19世紀フランス文学
	大嶋健太郎	助教	近代フランス文学（マルセル・ブルースト）
	喜田 浩平	教授	フランス語学
	竹中 公二	助教	16世紀フランス文学
	築山 和也	教授	19世紀フランス文学
	西野 絢子	教授	現代フランス文学・日仏演劇交流
	ブランクール, ヴァンサン	訪問教授（招聘）	フランス文学
	岑村 傑	教授	近現代フランス文学
	森元 規裕	助教	17世紀フランス文学・思想

図書館・情報学

日本における図書館・情報学の研究、教育のパイオニア

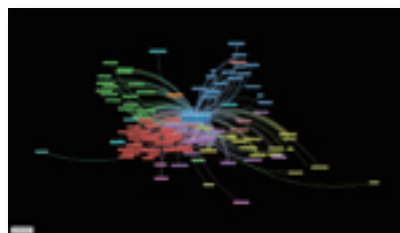
図書館・情報学専攻では、個人や機関により生産された経験や情報、知識について、その流通、組織化、提供、利用、保存といった諸側面の基本的な知識と、情報の視点から問題を発見し自ら解決できる能力の習得をめざします。

前身である図書館学科は、1951年米国の援助のもと日本で最初の大学における図書館員養成機関として設立されました。ロバート・ギトラーは、設置大学の選考に際して、英訳福翁自伝に感銘を受け慶應義塾大学を選んだとされています。当初は5名の米国人教授、米国人司書による全て英語の授業で、通訳がついていました。

その後、図書館学だけでなく、さまざまな記録情報を扱う情報学も含めた図書館・情報学へと対象を拡大し、大学院も充実させて来ました。現在は図書館コース、情報メディアコース、情報管理コースの3コース制のカリキュラムをとり、図書館界に多くの優秀な人材を送り出すとともに、情報から人間と社会を考える能力を持つ人材を広く社会に送り出しています。日本における図書館・情報学の教育、研究のパイオニアとしての地位を築いてきました。



地理的データによる公共図書館の分析



論文における慶應義塾大学と共著機関の分析



埼玉県立図書館がん情報コーナー



グーテンベルクの印刷工場の想像図

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	安形 麻理	教授	書誌学、書物史、図書館・情報学
	池谷のぞみ	教授	エスノメソドロジー、情報行動、知識の社会学、サービスデザイン
	岸田 和明	教授	情報検索、テキストマイニング
	永崎 研宣	教授	情報技術を用いた人文学における研究手法の改良
	福島 幸宏	准教授	図書館情報学、アーカイブズ、デジタルアーカイブ、日本近現代史
	松本 直樹	教授	図書館・情報学
	宮田 洋輔	助教	図書館・情報学
	和気 尚美	助教(有期)	図書館・情報学

Sociology

社会学

社会や文化に対する 広い視野と深い洞察を育む

社会学専攻で学ぶということは、古今東西の多様な文化と社会に言及しつつ、現代社会の諸々の問題にとり組むことであり、そうすることで、人間を総合的に理解して、私たちの生を自ら作ることに繋げるといことです。

社会学専攻には社会学とともに、社会心理学と文化人類学などの領域が含まれています。この三つの学問分野を横断的に学ぶことが他大学の社会学専攻と大きく異なる特徴です。これら三分野の概論や社会調査、社会学史は必修科目になっています。そして、それを土台にして、自分自身の研究の方向性やスタイルをどのように作るのかが大事になります。その自由度は高く、そのための多様な科目が設置されています。

もしみなさんが、時代の変化に目を向けるとともに、社会や文化の各分野に対する広い視野と深い洞察力を育み、自主的で積極的な学習態度を身につけようとするならば、単なる知識ではなく、フィールドでの具体的な実践をも網羅する社会学の学習が可能になります。



ノーベル賞を受賞した社会学者ジェーン・アダムス



世界で最初の社会学的実験室
(イギリス・エジンバラ)



渋谷交差点

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	李 光鎬	教授	メディア・コミュニケーション研究、普及研究、社会心理学
	小倉 康嗣	教授	生の社会学、ライフストーリー研究、記憶と継承の社会学
	榎尾 直樹	准教授	文化人類学、宗教社会学、宗教学
	木下 衆	准教授	医療社会学、社会調査法、家族社会学
	阪井裕一郎	准教授	家族社会学・歴史社会学
	杉浦 淳吉	教授	社会心理学、環境行動論、リスクコミュニケーション、ゲーミング
	近森 高明	教授	文化社会学、都市社会学、歴史社会学
	藤野 陽平	教授	文化人類学、東アジア地域研究
	森川 剛光	教授	社会学理論、社会学史、社会科学の哲学、知識社会学、(歴史)文化社会学、政治社会学、法社会学、世界社会論

Psychology

心理学

厳密な実験と徹底的な データ分析による実証研究

慶應義塾の心理学研究室は、創設者横山松三郎君のもとで1926年3月に実験室が開設され、1928年には文学部の正式な専攻となりました。

戦後、1951年に大学院（社会学研究科心理学専攻）、1952年には動物実験室、同時期に日吉キャンパスの研究室も開設され、これまでに多くの卒業生、研究者を輩出しています。

その歴史の中で研究室、実験室の移転やカリキュラムの改変を幾度か経ていますが、その研究・教育の理念の中心に厳密な実験と分析を基盤とした徹底的な実証研究による心理の探究があるという点は創設時から一貫しています。

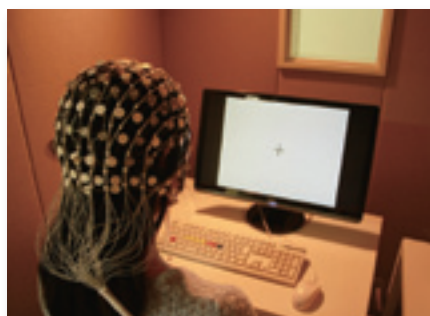
現在は知覚・行動・学習・認知・発達・生物・神経心理等の諸領域にわたる研究・教育をおこなっており、実験科学的なアプローチを用いているという点で文学部の中でも独特な専攻となっています。



オペラント箱を用いた動物実験



頭の認識を調べる心理学実験



脳波測定実験

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	板口 典弘	准教授	認知心理学、認知神経心理学、計算論的運動制御
	梅田 聡	教授	認知神経科学、神経心理学、生理心理学、認知心理学
	大森 貴秀	助教	発達心理学
	川畑 秀明	教授	感性科学、認知神経科学、実験心理学、神経美学、抗加齢科学
	北 洋輔	准教授	臨床発達心理学、障害科学、認知神経科学
	寺澤 悠理	准教授	認知神経科学、神経心理学、感情神経科学
	兎田 幸司	准教授	学習心理学、行動神経科学、行動薬理学、比較認知科学、感性認知脳科学
	皆川 泰代	教授	言語心理学、発達心理学、認知神経科学

教育学

「人間形成」に関わる営為全般を 視野に含めながら教育の本質を探究

教育学は、18世紀後半期以後の西洋先進諸国における近代学校制度の整備・確立を背景として成立・発展しました。今日でも、教育学は、各大学の教職課程に組み込まれている教科教育学や教育方法学などに代表されるように、一般的には教員養成や学校教育への貢献を目的とする学問として理解されています。

それに対し本専攻では、「人間形成」に関わる様々な営為全般を視野に含み込みながら、教育の本質を探究しています。それぞれの時代や社会における人々の生の営みには、学校教育の枠組みからは溢れ出してしまうような多彩な人間形成の営為が埋め込まれています。それらを再発掘し再評価することで、教育的営為や教育的知見の豊かな可能性を探究している点に本専攻の最大の特色があります。またその探究を、人文科学や社会科学はもとより、自然科学の方法をも駆使しながら展開している点にも本専攻の独自性があります。こうして「教育」を包括的な人間形成の関心に立って理解することで、学校教育の問題にも、より多角的で重層的なアプローチを提供できると考えています。



教育史散歩
慶應義塾発祥の地を訪ねる



教育測定実験Ⅰ



幼児向け発達検査実習場面

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	綾井 桜子	教授	フランス教育史、教育思想史
	伊藤 敦広	准教授	ドイツ教育思想史、陶冶理論（人間形成論）
	川口 純	准教授	比較教育学、国際教育開発論
	川本 哲也	准教授	パーソナリティ心理学、教育心理学
	藤澤 啓子	教授	発達心理学
	山梨 あや	教授	日本教育史、社会教育史
	渡邊福太郎	准教授	教育哲学

Human Sciences

人間科学

社会の中の「人間」を 多面的に把握する

社会的・経済的・文化的な環境変化の波によって、私たちの生命観、人間観、倫理観は常に揺さぶられています。固定した知的枠組みでは捉えきれない複雑な様相が、現代社会には内包されています。グローバリゼーション、経済・情報格差、大規模自然災害、情報技術、遺伝子操作など多種多様な問題がからみ合って、人間の感性、価値観、ライフ・スタイルが大きく変貌し多様化しつつあるのです。このような社会にあって、人間科学専攻の使命は、社会、文化および自然をめぐる諸問題の理解と解決を志向して、人間性の多面的把握と、そのための新しい知的枠組みを、学際的視野から構築・探究することです。

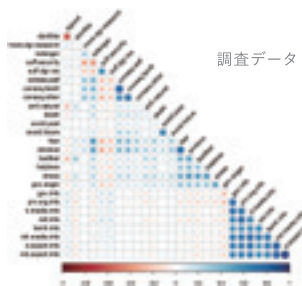
2年次は人間科学の基礎を学び、3年次からは特定分野を専門的に学ぶための研究会に参加することができます。4年次は研究会に所属して卒業論文に取り組むコースと、卒業試験を受けるコースのいずれかを選択します。卒業後の進路は、就職（一般企業、マスコミ、教員、官公庁）から大学院進学まで多方面にわたっています。時代の変化に好奇心を向け、人間の問題を掘りさげて考えようとする学生を歓迎します。



アフリカでのフィールドワーク



実験室の様子



調査データ

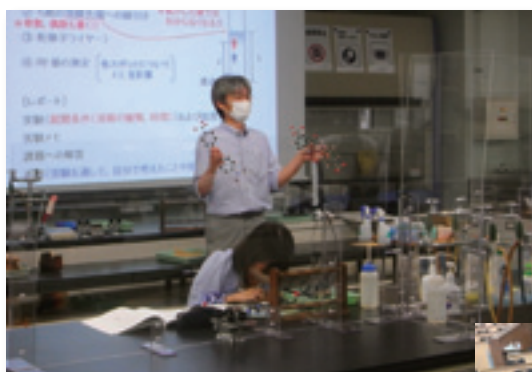
スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	稲葉 昭英	教授	計量社会学、社会統計学、社会調査法、家族社会学、福祉社会学
	上島 淳史	助教	社会心理学
	織田 輝哉	教授	理論社会学、数理社会学、計量社会学
	北中 淳子	教授	医療人類学、精神医学史
	佐川 徹	教授	人類学、アフリカ地域研究
	菅 さやか	准教授	社会心理学
	常松 淳	教授	社会学
	平石 界	教授	進化心理学、深層学習心理学、社会心理学

自然科学

諸科目を通じて自然科学の論理的な考え方を学ぶ

自然の一部である人間の理解には、生物的存在としての人間、物質的な存在としての人間、人間を取りまく地球環境、さらには、この地球を含む宇宙の理解も不可欠です。したがって、生物学、物理学、化学を、それらの具体的な理解に不可欠な実験と共に学ぶことは極めて有益です。さらに、数学、天文学、地学、人類学、心理学と広大に広がる自然科学系列の諸科目を通して自然科学の論理的な考え方を学ぶことは、文学部のどの専攻にあっても、自然科学の豊かな教養と柔軟な思考力が役立つはずです。

日吉1年次には、実験系科目と講義系科目が、三田の2年次以降には講義系科目が自然科学系列科目として開講されています。卒業までに8単位以上の取得が必要です。この他に、1年次には総合教育セミナーが、2年次以降には、自然科学研究会が開講され、より専門的かつ実用的な自然科学の知識、考え方が学べます。



化学実験



生物学実験



人類学実習

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	岡本 昌樹	教授	触媒化学、多孔体材料
	小島 りか	助教(有期)	天然物化学
	亀谷 匠郁	助教(有期)	神経科学、発生生物学、免疫生物学
	倉石 立	准教授	発生生物学
	河野 礼子	教授	自然人類学、人類進化学
	古川 亮平	准教授	発生生物学、免疫生物学

Foreign Languages

諸言語

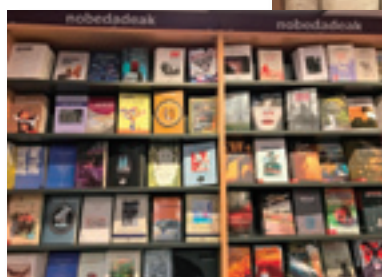
文学部の各専門を補い、 知識や理解を深める

グローバル化により世界の一体化が急速に進行している現代では、複数の外国語の習熟と、その背景にある文化・社会・歴史等についての相互理解が要求されます。これからの時代を担う学生に、できるだけ広い範囲の言語と文化を修得してもらうために、文学部には17専攻以外に諸言語部門が設置され、日吉から三田へと徐々にステップアップして各言語が学べるようになっています。

具体的には、ギリシア悲劇を研究しているギリシア語・ラテン語教員、朝鮮半島（家族の変容・徴兵制）や日本（在日コリアン・漁民）をフィールドとして研究している韓国語教員、スペイン語圏の文学と文化（バスク語文学）を研究しているスペイン語教員、ローマ教皇史を始めとするイタリア史を専門とするイタリア語教員、ロシア文学とロシア文化史を専門とするロシア語教員がいて、文学部の各専門を補い、知識や理解を深めてくれます。また、諸言語部門の教員が、17専攻では扱わない研究分野の授業を三田で開講しています。



古代ギリシア恋愛小説
『レウキッペーとクレイトボーン』の
16～18世紀の様々な刊本



サンセバスティアン市内の書店のバスク語新刊コーナー



ソウルでのアンケート調査

スタッフ紹介	氏名	職位	専門領域
	金子 奈美	助教	スペイン語圏の文学・文化、バスク語文学
	金 柄徹	教授	韓国語、文化人類学
	越野 剛	教授	ロシア文学・文化史
	小林 薫	准教授	西洋古典学
	原田亜希子	助教	イタリア史
	諸星 妙	助教(有期)	スペイン美術史

Graduate Schools

〔大学院〕

文学部は1学科17専攻と2部門から成っていますが、大学院は文学研究科と社会学研究科に分かれます。



知のさらなる深みをめざして

文学研究科

— 知の探求者として

Graduate School of Letters



文学研究科は、慶應義塾のなかでも最も古い研究科のひとつとして、人文学諸分野の研究に大きな貢献をしてきました。現在は哲学・倫理学、美学美術史学、史学（日本史学・東洋史学・西洋史学・民族学考古学の4分野）、国文学、中国文学、英米文学、独文学、仏文学、図書館・情報学の9専攻から成り、広く人文学全体をカバーして最高水準の専門研究を国際的に展開するとともに、修士課程独自のプログラムとして、アート・マネジメント、情報資源管理、日本語教育学の各分野では、高度な専門知識を備えたプロフェッショナルを養成しています。近年では専任教員免許の取得や学芸員資格等をさらに活かすために進学を希望する人も増えています。

修士課程及び後期博士課程の授業の大半は少人数の演習科目で、半期を単位として履修できるので、各自の専門的興味を反映した柔軟な履修計画をたてることが可能です。論文の指導教授以外にも、文学部の専任教員の多くが大学院科目を担当しており、さらに全学的な「スーパーグローバル事業」の一環として、海外から著名な研究者を博士課程の学生の副

指導教授として招聘することもあります。三田キャンパスには人文学分野のさまざまな研究所だけでなく、和漢洋の貴重書を数多く所蔵する慶應義塾図書館や斯道文庫があり、これらの機関と連携して歴史資料や貴重書を活用した研究や方法論を学ぶ環境も整っています。

学生の研究テーマに密着した丁寧な指導とキャリア支援は、文学研究科の一番の特色であり、少人数セミナーと個別の論文指導を通じて、学生は専門研究を深め、その成果を国際的に発信しています。海外の研究機関との交流も活発で、共同でのセミナーや海外研究者による講演会も毎月のように開催されています。

入学試験は修士課程が年2回（9月と2月）、後期博士課程が年1回（2月）おこなわれ、募集人員は修士課程が1学年135名、後期博士課程は45名となっています。

社会学研究科

— 「知の新たな生産者」の育成を目指して

Graduate School of Human Relations



社会学研究科は文学部人間関係学系の4専攻（社会学、心理学、教育学、人間科学）と経済学部・法学部・メディア・コミュニケーション研究所・教職課程センターの専任教員が研究と指導を行う学際的な独立大学院で、社会学・心理学・教育学の3専攻から成っています。いずれの専攻においても、さまざまな文献を通じて既存の研究成果を学び、かつ、調査研究を着実にを行うための理論や調査・分析方法を体系的に修得することになります。さらに、現代社会の問題の解明に取り組むべく、知的流行を批判的に摂取しながらも、新たな角度から社会を分析する力を持つ研究者、換言すれば、「知の新たな生産者」を養成することつねに意識し大学院教育を展開しています。

そのために社会学研究科では、3専攻にまたがった科目の設置、院生の共同指導体制の確立などによって、領域横断的な

研究教育体制を積極的に進めています。また、海外の大学との研究協定締結（Ex.ウィーン大学）やダブル・ディグリープログラム協定の締結（Ex. 博士課程：南オーストラリア大学）、海外特別招聘教授による集中講義などを通して、研究教育体制の国際化を強力に推進しています。

卒業後の進路は、大学の研究者や中等教育機関の教員になる者のほか、公務員、シンクタンク、研究所、福祉関係、広告業、マスメディア等さまざまで、海外の大学・研究機関に留学をする者も少なくありません。

入学試験は年1回、定員は修士課程が1学年40名、後期博士課程は11名です。教育学専攻修士課程では、現職教員を対象とした入学試験も実施しています。また、2025年度実施の入試より、内部推薦入試制度を設けます。

〔研究所〕



多彩な研究所設置講座

慶應義塾大学には、学部・研究科以外の幅広い活動の場として研究所・附属施設が多数設置されており、従来の学問領域にとどまらない柔軟な研究環境を構築しています。この中から文学部と関連の深いものを紹介します。多くの研究所には設置講座があり、所属専任・関連教員が、学生を指導しています。詳しい内容については、各ホームページ等を参照してください。



■ アート・センター

慶應義塾唯一の芸術を専門研究領域とする研究所です。博物館相当施設として、アート・スペース（三田キャンパス南別館1階）では年間を通じて展覧会を開催しています。また、研究会・公演などの各種催事の開催、アーカイブの構築、国内外における芸術資料の研究的活用の促進などの活動を通して、現代における芸術の問題に取り組んでいます。（三田）

■ 言語文化研究所

世界の諸言語、諸地域や各時代の文化・思想、言語学・言語理論などの研究を推進しています。学部では開設していない個別言語の講座を含むサンスクリット、アラビア語、古代エジプト語、ヘブル語、タイ語などの12言語におよぶ講座を開設しています。（三田）

■ 外国語教育研究センター

慶應義塾の外国語教育を全体的に捉え、活動する研究機関です。外国語教育に関する研究を推進するほか、特色ある外国語科目の開講や自律学習環境の提供を行い、国際舞台で通用する言語運用能力の習得をめざす塾生を支援しています。（三田・日吉）

■ 教職課程センター

教職課程の運営のほか、教員養成に関する調査・研究を推進しています。学生は教職課程センターに登録（例年300名から400名が新規登録）し、所定の科目を履修することで中学校および高等学校の教員普通免許状に必要な単位を修得できます。（三田）

■ 教養研究センター

多分野にわたる教養教育に関する研究活動を推進することを目的に設置されました。大学教育カリキュラムの研究、身体と言語のあり方をめぐって新しい「知」を探り、言語力育成を目指す研究や実験授業、学問的・知的活動のためのスキル・考え方を身につけるアカデミック・スキルズを学部横断的に提供しています。（日吉）

■ 国際センター

国際交流活動の拠点として世界各地の協定大学と研究者や学生の交流を推進しています。義塾で学ぶ留学生や留学を希望する学生をサポートし、短期海外研修プログラムも運営しています。また、「国際センター講座」として英語による科目を年間約80科目設置しています。（三田）

■ GICセンター

GICセンター（Center for Global Interdisciplinary Courses）は国際的かつ学際的な人材の育成を主たる目的として設立されました。GIC科目では、講義、質疑応答、ディスカッション、レポート、試験等の一切が英語（またはその他の外国語）で行われます。約80科目のGICセンター独自科目と約400科目のGIC認定科目は4つのキャンパスに広がり、全ての学部生が履修することができます。GIC科目を40単位以上取得した学生にはGIC Program修了証が授与されます。（日吉）

しどう ■ 斯道文庫

麻生太賀吉氏寄贈の図書を基に、和書・漢籍と基本研究書など約17万冊を所蔵し、国内外の和漢書の現地調査、マイクロフィルムやデジタル撮影による副本作成、本の比較校勘などを行っている東洋古典文学（書誌学）の研究所です。（三田）

■ 福澤研究センター

福澤諭吉と慶應義塾を視野に置き、近代日本研究に資することを目的に設立されました。福澤および義塾の歴史に関する資料の収集・整理・保存や、福澤門下生などの義塾出身者についての調査研究のほか、大学設置講座、講演会なども行っています。（三田）

■ 東アジア研究所

慶應義塾の東アジア研究を国内的・国際的ネットワークを通して発展させるため、学際的共同研究を推進しています。そのために、内外の研究機関や研究者との学術交流を図り、歴史研究と現状分析、および基礎研究と応用研究を重層的に展開しています。研究所内に、現代中国研究センター、現代韓国研究センターが設置されています。（三田）

■ 日本語・日本文化教育センター

留学生に対する日本語・日本文化に関する教育の発展を目的として設置しています。別科・日本語研修課程、学部の第二外国語としての日本語の授業を運営し、文学研究科・国文学専攻日本語教育学分野にも協力しています。別科・日本語研修課程では約180名の留学生が学んでいます。（三田）

■ メディア・コミュニケーション研究所

メディア・コミュニケーションの研究と教育を目的としています。研究生には、基礎科目やマス・メディアの制度、法律、政策、歴史などに関する科目、実務家による新聞・放送・広告の授業などを開講しています。研究生は「研究会」が必修です。（三田）

■ 体育研究所

健康・運動・スポーツに関する研究と教育を目的とした組織です。塾生・教職員を対象とした各種大会や講演会など、スポーツの振興を目的とする活動も行っています。体育科目の授業のほか、地域住民への感動教育・体験教育の一助も担っています。（日吉）

■ 自然科学研究教育センター

自然科学の研究と教育を促進し、さらなる質の向上を意識しながら、世界文明に貢献することを目的としています。学部、キャンパス、研究領域を超えるだけでなく、一貫教育校とも連携しながら、自然科学における研究と教育活動を行っています。（日吉）

Correspondence Courses

〔通信教育課程〕



慶應義塾大学の通信教育課程には戦後間もない1948年の開講以来、70年以上の歴史があり、さまざまな事情で通学課程に通えなかった人、自分の向学心をさらに満たしたい人、自らの学歴を高度化することで職業的なステップアップを目指している人を中心に現在、全国で8,000人

以上の幅広い年齢や職業の学生が学んでいます。文学部、経済学部、法学部の3学部があり、教授陣は通学課程と同じ教員で構成され、学生は所定の単位を修得すれば慶應義塾大学の卒業生として、通学課程と同じ学士の学位を取得できます。学びやすい学費設定も魅力の一つです。

【入学資格】

大学を卒業することを目的とした正科生には、学歴により、主に高等学校卒業者および卒業見込みの人を対象とした普通課程、短期大学・高等専門学校卒業者および卒業見込みの人を対象とした特別課程、大学卒業者および卒業見込みの人を対象とした学士入学の三種類があります。普通課程では卒業のために4年間、特別課程では3年間、学士入学では2年半は在籍する必要がある、どの課程も入学時から最長12年間に在籍できます。

【学習システム】

通信教育課程では、テキストによる通信授業、スクーリングによる面接授業を中心に、放送授業、インターネットによるメディア授業（E-スクーリング）などさまざまな授業形態を組み合わせて、自分のペースで学習に取り組めます。通信授業は配本によるテキストの学習が終わり、レポートを提出すると、その科目について科目試験を受験することができます。試験は原則として年4回（1回に東京を含む14都市程度で実施）、大学から派遣される教職員のもとで行われます。スクーリング（夏期スクーリング・夜間スクーリング・週末スクーリングなどがあります）は、一定期間通学して教室等で直接授業を受け、試験を受けるものです。卒業には所定の単位を修得した上で、本学専任教員の指導を受けながら卒業論文を作成し、卒業試験に合格することが必要です。

【文学部の通信教育課程】

— とらわれのない眼で人間を探究する —

慶應義塾大学の文学部は、単に文学系統だけでなく、人文科学のすべての領域を広くカバーしています。そこでは人間社会の機構や機能を含め、人間そのものの探究を究極の目標として、さまざまな研究と教育がおこなわれています。通信教育課程でも、哲学、倫理学、美学美術史学、社会学、心理学、教育学、人間科学の各専攻を中心として、広義の哲学に関する研究をおこなう第1類（哲学、美学、人間関係学、図書館・情報学の学士号が取得可能）、日本史学、東洋史学、西洋史学、民族学考古学の各専攻を中心として、歴史に関する研究をおこなう第2類（史学の学士号が取得可能）、国文学、中国文学、英米文学、独文学、仏文学の各専攻を中心として、文学と言語に関する研究をおこなう第3類（文学の学士号が取得可能）に分かれ、現在3,500人以上が学んでいます。自分の所属だけでなく、他の類の科目も幅広く履修することが求められます。また、教職課程の必要な単位を合わせて修得すれば、中学校教諭1種（国語科、社会科、英語科）や、高等学校教諭1種（国語科、地理歴史科・公民科、英語科）の教員免許状を取得することも可能です。

【慶友会】

全国各地に存在する通信教育課程の在学生在が自主的に結成している慶友会は現在50団体以上に及び、定期的に例会を開いて勉学上の情報を交換したり、講演会、研究会をおこなったりしています。各慶友会の活動地域に慶應義塾の教員を招き、セミナーや講演会を開くことができる講師派遣制度もあります。こうして先生方と親睦を深め、楽しい学習の機会を持つことができるのも通信教育課程の特色です。

さらなる詳細は、通信教育課程のホームページをご覧ください。

<https://www.tsushin.keio.ac.jp>

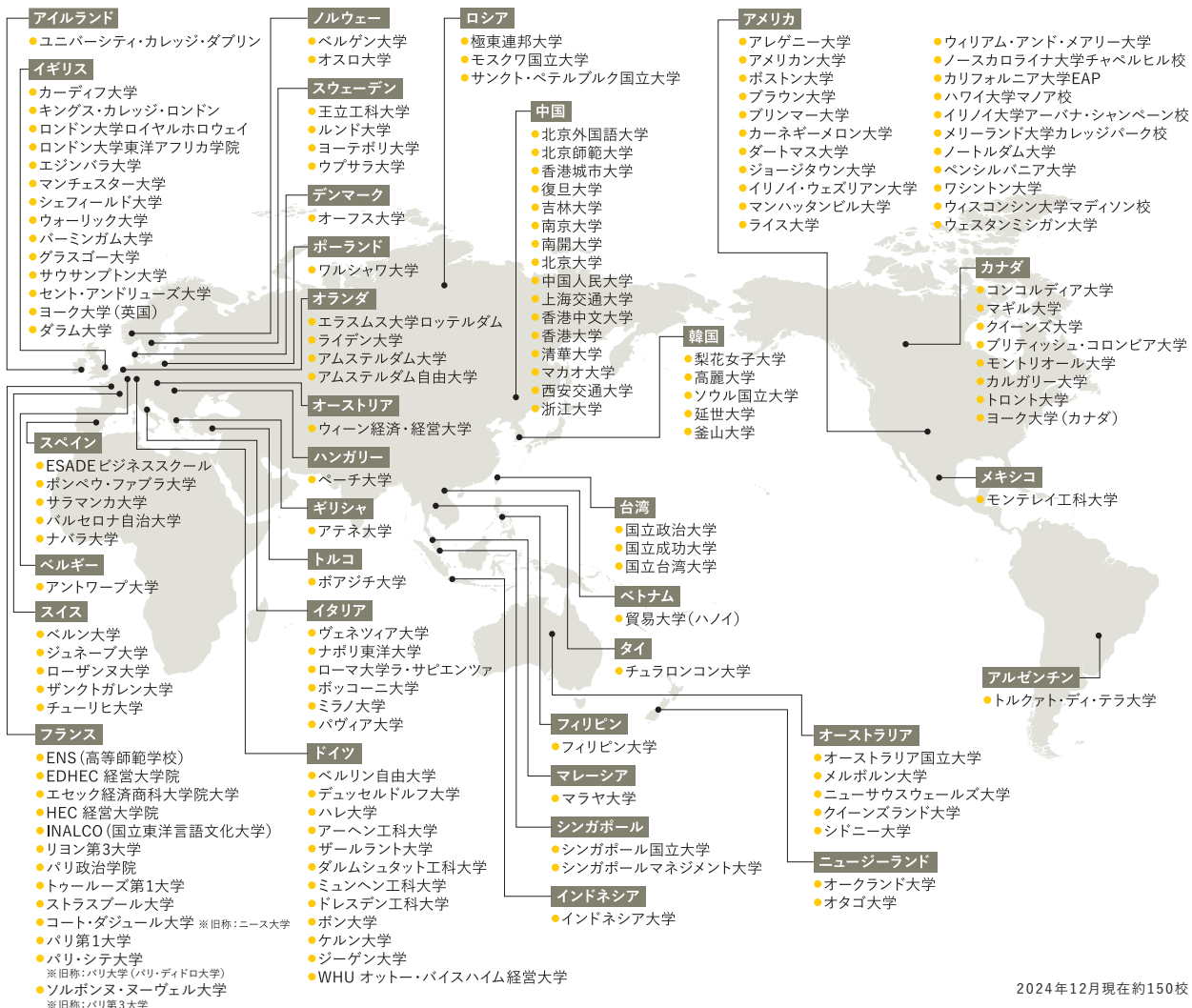


留学 の すゝめ

慶應義塾の創設者・福澤諭吉は幕末期にアメリカとヨーロッパの両方を時間をかけて視察することができた、当時としては稀な知識人でした。その伝統を継ぐ慶應義塾大学は、学問と見聞を広く世界に求めることを極めて重視しています。

本学は現在、世界の300以上の大学・高等教育機関等と協定を締結し、学生交換、学術交流、研究連携を展開しています。協定校との間には一年間の派遣交換留学制度や夏季・春季休校を利用した短期海外研修プログラムなどがあります(詳細は国際センターのウェブページをご覧ください。<https://www.ic.keio.ac.jp>)。交換留学生として留学すれば、授業料は本学に納入するだけで済みます。ここでは、フランスに一年間の交換留学をした小島世莉さん(仏文学専攻)の体験記を紹介しましょう。

〔派遣交換留学(全塾)協定校一覧〕





Seri Kojima

私が交換留学を目指し始めたのは大学2年生の春頃でした。それまでは、数年間勉強してきたフランス語の世界に飛び込んで生活してみたいという漠然とした憧れを持ってはいたものの、実際に留学に踏み出すことができずにいました。ですがこのままだと絶対に後悔するという強い思いに背中を押され、留学を決めました。交換留学に出願するにあたり、まずは志望する留学先の大学を選びます。大学選びは過去の先輩方の報告書を読んだり、大学のホームページを見たりして情報を集めました。慶應の協定校は規模が大きく多様な学びができる大学が多いためとても迷いましたが、専攻している仏文学の知見を深めたいと思い、文学部の授業が充実しているリヨン第三大学を志望することに決めました。



志望大学を決めてからは、出願する書類の準備とフランス語力の向上に努めました。志望先の大学はフランス語B1レベルが条件でしたが、現地の大学の授業についていけるようにB2の受験を決めて日々勉強していました。慶應の授業でネイティブの先生の授業を今まで以上に多く履修したり、ラジオやYouTubeを視聴したりして、スピードの速いフランス語に慣れるようにしていました。思い返すと通学中や寝る前など、日常のあらゆる場面でフランス語に触れていたように思います。またネイティブの先生に何度もDELFの面接対策をしていただくことで、実際に文章を組み立てて話す練習にも取り組みました。

学内の書類選考と面接を終えて2年生の2月ごろに派遣交換留学生として選んでいただいたからは、すぐに現地の大学に通う準備を始めました。海外に行くのが初めてだった私は、寮の申請や大学の登録など多くの手続きがフランス語で行われることに戸惑いを感じました

が、出発の夏が近づくにつれてその不安がワクワクに変わっていったのを覚えています。

留学先での生活は、日常のどんな場面を切り取っても本当に素敵な思い出に溢れています。初めの頃は言語や文化の壁に圧倒され、自分の力不足に落胆することもありました。しかし諦めずに積極的に人と関わる機会を作ることによって、フランス語の上達を実感すると同時に多くの友人を作ることができました。



休みの日には公園でピクニックをしたり友人の実家に遊びに行ったりと、徐々に現地での生活に溶け込み、毎日が充実していました。友人たちと大学で勉強を教え合ったり、授業の後に一緒に夕飯を作ったりした日常が今では恋しいです。もちろん大学の授業についていくことは大変ですが、周りの力を借りながら毎日の復習を徹底し、最後の試験に合格できた時にはこれまでにない大きな達成感を感じました。こうして起居寝食の場をフランスに移転し多くの経験をすることで、私自身の人間力やフランス語力は大いに成長したと感じています。

帰国して振り返ると、この留学で多様な価値観や生き方に触れたことで、自分がこれまでいかに固執した考え方にとらわれていたか、どれだけ狭い世界で生きてきたかということに気がかされます。同時に、多角的で豊かな考え方ができるようになったことで、広い視野を持って就職活動に取り組むことができました。最終的には、世界と関わりたいという思いで、卒業後は内定をいただいた日系のメーカー企業に就職することを決めました。高い技術力を持つ日本の製品を世界に広めながら、世界中の多くの人の生活の豊かさに貢献していきたいと考えています。

奨学金

奨学金制度とは、能力のある学生に対して一層の成長を促すこと、もしくは金銭的・経済的理由により修学困難とされる学生に対して修学を支援することを目的として金銭の給付・貸与を行う制度のことです。

慶應義塾大学で扱う奨学金は、「慶應義塾大学独自の奨学金」、「民間団体・地方公共団体の奨学金」、そして国の育英事業である「日本学生支援機構奨学金」、「高等教育の修学支援新制度」の3つに大きく分かれます。奨学金によっては併願・併用することも可能です。

まず、慶應義塾大学独自の学内奨学金は、すべて返済不要の給付型奨学金で、今後も拡充していく予定です。その多くが経済支援を目的としていますが、成績優秀者を対象とした奨学金、家計状況が急変した際の支援、地方出身者や海外でのグローバルな学習活動への支援など、学生のニーズに対応するさまざまな奨学金を用意しています。塾員（卒業生）で結成される様々な三田会（同窓会）や篤志家など、慶應義塾大学を支援してくださる多くの方々からいただいた寄付金で運営している奨学金が多く、「社中協力」を実感できるのも特徴です。ほとんどの奨学金の給付期間は1年間ですが、原則再申請できます。1年間単位

で申請できるため、それだけ多くの学生にチャンスがあります。入学後の申請が中心ですが、一般選抜前に申請できる地方出身者向けの奨学金として、1都3県（東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県）以外の日本国内の高等学校等出身者を対象にした返済不要の給付型奨学金「学問のすゝめ奨学金」があります。

民間団体・地方公共団体の奨学金は、多くの場合、一度採用されると卒業時まで継続的に給付または貸与されます。

国が扱う日本学生支援機構の奨学金には、主に高校予約採用と入学後に申請する定期採用があり、返還義務を負う貸与型（無利子の第一種と有利子の第二種）と授業料減免と返還不要な給付型奨学金による「高等教育の修学支援新制度」があります。

これらの奨学金は、いずれも家庭の経済状況や学力・人物によって選考されますが、それぞれ趣旨・金額・受給期間・返済義務の有無などが異なります。各々の特性を認識し、自分にあった奨学金を選びましょう。詳細については、奨学金webサイト(<https://www.students.keio.ac.jp/com/scholarships/apply/form.html>)をご覧ください。

文学部学生が出願できる奨学金の概要（すべて2024年度実績）

【学内奨学金】（給付型）（2024年度実績）

慶應義塾大学給費奨学金	経済的に修学困難であると認められ、成績・人物ともに優秀な者。	50万円もしくは25万円 / 年額
慶應義塾大学修学支援奨学金	急激な家計状況の変化、経済的な困窮のため、経済的に修学が困難な者。	学費の範囲内の金額（平均は年額約30万円）
慶應義塾大学創立150年記念奨学金（海外学習支援）	勉学の意欲を持ちながらも、経済的理由によりグローバルな学習活動に参加することが困難な者。	10、20、30万円 / 年額 ※参加プログラム・渡航先の国や地域による
慶應義塾維持会奨学金	人物・学業成績ともに優秀で、かつ経済的に学業に専念することが困難な者。出身高校の所在地が東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県以外の道府県の者を優先。	50万円 / 年額
指定寄付奨学金	奨学金によって異なる。育英型、経済支援型、家計急変者支援型があり、約30種ある。	10～60万円程度 / 年額 ※奨学金によって異なる

学内の奨学金に関する情報は塾生サイトを閲覧してください。

【学問のすゝめ奨学金】 一般選抜出願時（入学前）に申請可能な奨学金です

募集対象	奨学金額	受給期間
■ 慶應義塾大学の学部第1学年に入学を強く希望する東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県以外の日本国内の高等学校等出身者 ■ 人物及び学業成績が優秀であるにもかかわらず、経済的理由により本学への入学に困難を来している者	■ 初年度年額60万円 ■ 初年度は上記金額に入学金相当額を加算（20万円） ■ 入学2年目以降は成績優秀者の奨学金額を増額（年額80万円） ■ 奨学金の返済は不要	■ 最長4年間 ■ 毎年の審査を経て継続受給が可能

※採用された学生が国による「高等教育の修学支援新制度」の対象となる場合は、奨学金額が減額となることがあります。

7月中旬に以下のwebサイトで募集要項が公開されます。

<https://www.students.keio.ac.jp/other/prospective-students/scholarship-gakumon.html>

学問のすゝめ奨学金



【民間団体・地方公共団体奨学金】 給付型と貸与型を合わせて、100種以上あります。（2024年度実績）

民間団体、地方公共団体の奨学金に関する情報は塾生サイトを閲覧してください。

【国による「高等教育の修学支援新制度」】 授業料減免と給付型奨学金による支援が受けられます。

支援対象要件や支援内容は右記のwebサイトで確認できます。日本学生支援機構 <https://www.jasso.go.jp/shogakukin/about/kyufu/>

学生生活と奨学金

奨学金制度は、優秀な学生、あるいは修学の意味はあるものの経済的理由により学費や生活費の支払いが困難な学生に対して、主に学費や生活費を支援することを目的に、金銭を給付・貸与される制度です。高校生のときに予約ができる奨学金もありますが、慶應義塾では入学後に申請できる奨学金が数多くあります。これから慶應義塾で学ぶ皆さんには、彼らの話も参考にして、自分に合った奨学金を見つけていただきたいと思います。

■ A・R さん

英米文学専攻3年（インタビュー時）

—— 慶應義塾大学に入ろうと思ったきっかけは？

一番の理由は、中学校の時に通っていた塾の恩師で尊敬していた先生が慶應義塾大学出身だったことです。また、大学でやりたいこと、勉強したいこともあまり決まっていなかったため、慶應の文学部では、1年生の間にいろいろなことを学んだ後に2年生になってから自分の学びたいことを選べるというのも私にとっては良かったです。はっきりと希望の大学を決めたのは高校3年生の春くらいです。

—— 受給されている奨学金はどのような種類のものでしょうか？

日本学生支援機構の貸与型奨学金です。高校の時の成績や家庭の収入によっては給与型を取れることもありますが、私は返済しなくてはなりません。奨学金についてははじめは全然考えていなかったのですが、大学受験がもう目の前という時に、高校で奨学金の手続きの通知があったんです。県立高校だったからか生徒の大半が大学に入って奨学金を受けるので、必要書類の連絡が全員に来て、それで皆と同時期に手続きしました。私は遠くから通っていて定期代が半年で7、8万円になってしまうのと、サークルなどの出費や、教科書代もあるので、借りていて良かったと思います。

—— 奨学金はどのように使っていますか？

学費は奨学金で、自分の身の回りのことはアルバイト代で払っています。両親と話し合って、学費は奨学金から出して、それ以外には使わないように決めています。

—— 奨学生として心がけていることはありますか？

当たり前のことですが、毎日学校に行って、自分が取った授業の単位を落とさないようにしっかり勉強することですね。日本学生支援機構の奨学金は成績が悪かったり学校に全然来ていなかったりすると停止されてしまうこともあるので、そこは気を付けています。

—— 英米文学専攻を選んだ理由は？

一番の理由は、日吉で受けた必修英語の、イギリスのサスペンス小説を深く読む授業がすごく面白かったことです。その小説を映画化すると想定し、自分が監督としてこういう演技をして欲しい、こういう表情でやって欲しいという指示をできるくらいに、英語を細かく読んで深層まで理解する授業でした。例えば小説の中で登場人物が足を組むシーンがあったとき、ただ足を組むと訳して済みますこともできますよね。でも先生は足を組むのはどういう表情でやっているの？と質問するのです。日本では足を組んでいたら、横暴な、生意気な感じととられることもありますが、別の文化圏の人たちは自分に余裕があることを相手に見せるため、相手を安心させるためにやっているという話を聞き、英語に対してすごく面白さを感じて、そこまで読み込めたら英語の作品をもっと楽しめるんじゃないかと思い、英米文学専攻を選びました。

—— 英米文学専攻の授業をたくさんこなされているのですか？

私の場合は2年生で文学史や英語史や音声学の必修科目を取れたので、ちょっと落ち着いてきたところです。2年生の時は、文学史系の授業の暗記事項が多く大変でしたが、皆と一緒に勉強しながら乗り越えました。

—— サークル活動やアルバイトはされていますか？

はい。私はK-POPが好きなので、K-POPのダンスをカバーするサークルを見つけて、1年次から入っています。時期によりますが、三田祭での公演が一番大きな行事なので、それまでの期間、10月11月は練習が多くて忙しいです。アルバイトは1年生の時には塾で、今はイタリアン・レストランと結婚式場でしています。基本的にはサークル活動がない日の夜にアルバイトをしています。

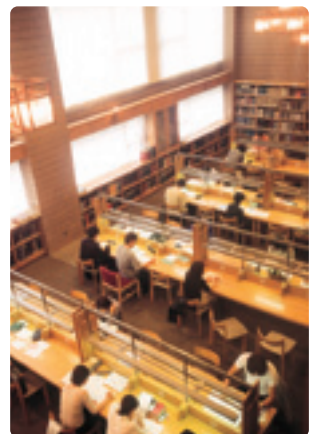
—— 授業と学外の活動を両立する上で、気を付けていることはありますか？

最近あまり無理をしてつめ込まないように、自分で調整しています。2年生の時に、お金も稼ぎ、サークル活動もして、もちろん大学の授業もある、とタイトなスケジュールを組んで、途中で体調を崩してしまいました。結局サークルもバイトもお休みするしかなくかえって周りに迷惑をかけてしまったので、今は用事がずっと続いた後は1日何も予定を入れない日を作るようにしています。

—— 慶應への進学を希望している方へ、奨学金の受給なども含めて、アドバイスやメッセージをお願いします。

大学に入ってみると、入学後に申し込める奨学金がいろいろあることを掲示板などの情報で知りました。給与型の奨学金の情報も載っています。留学資金や学費のために奨学金を利用している友達もいます。応募して面談を受けたり書類を書いたりするのは大変ですが、入学してからでも間に合うので心配しすぎなくて良いのではないかと思います。

私は慶應に入って、周りの友達からの影響や刺激を受けることができたのが一番良かったと感じています。勉強だけではなく、課外で自分が好きなことがあって、やりたいことがあって、そこに向かって努力している人がたくさんいるので、そういう姿を見ていると自分は何が好きなのかな、何がやりたいのかな、と考えるきっかけにもなりました。そうした部分も含めて志望してくれたらいいなと思います。



〔オープンキャンパス2025〕

今、世界は大きな変化の時代を迎えています。このような時代には、従来のものの見方や考え方が通用しにくくなります。そこで重要となるのが、自分の頭で考えること、すなわち学問することです。

学問というと難しく聞こえるかもしれませんが、どんな学問も、身近で小さな問題に興味を持ち、「？」を抱くことからスタートしています。このような営みを続けることが、徐々に大きな成果となって結実し、社会の問題を解決する力となっていくのです。

2025年度は、さまざまな学問の魅力に触れていただけるよう、入学広報イベント「オープンキャンパス2025」を開催します。文学部をはじめ全学部の教員が高校生や受験生の皆さん向けに模擬講義や学部説明を行い、学生の声を聞くことのできる機会を設けます。慶應義塾大学における学問の多様性、さらに文学部における研究内容の幅広さと奥深さを体験する絶好の機会といえるでしょう。

「課題が与えられ、正解を教わる」という高校までの授業とは異なり、「課題を自ら見つけ、解決策を生み出す」という大学での学び、学問を体験してみませんか。皆さんの参加を、心より歓迎します。



講義編		学生生活編
開催日時	2025年6月22日(日)	8月5日(火)・6日(水)
開催場所	慶應義塾大学 日吉キャンパス	三田キャンパス
対象学部	文学部をはじめとする慶應義塾大学全学部	

〔オープンキャンパス2025〕は事前申込制です。

申し込みの方法や実施内容の詳細については、
慶應義塾大学入学案内ページ

<https://www.keio.ac.jp/ja/admissions/>

および文学部のホームページ

<https://www.flet.keio.ac.jp/>

で随時更新します。



※写真はイメージです。

Extension Program

〔公開講座〕



2025年度公開講座 「発見する文学部」

慶應義塾大学文学部は、2010-13年度に公開講座「文学部は考える」を開講し、続いて「行動する文学部」(2015年度、文学部創設125年)、「文学部を体感する」(2016年度)、「橋渡しする文学部」(2018年度)、「文学部のひらく世界」(2019年度)、「めぐりあう文学部」(2020年度)、「問いかける文学部」(2021年度)、「対話する文学部」(2022年度)、「越境する文学部」(2023年度)、「交流する文学部」(2024年度)を開講してきました。

今年度は、「発見する文学部」と題して、独文学(近代ドイツ文学、文化史)、国文学(日本近現代文学)、英米文学(アイデアの歴史、18世紀研究)、中国文学(白話小説、特に三国志演義)という多彩な分野から、それぞれの専門家に登壇いただきます。17の専攻と2つの部門からなる文学部を横断して、文学部の広がりを感じ取っていただければ幸いです。

参加を希望される方は下記文学部ホームページより事前にお申し込みください。最新情報はホームページにてお知らせいたします。

6月7日(土) 「家族」をほどく：近代文学とジェンダー規範の日独比較

西尾宇広(独文学) × 尾崎名津子(国文学) 司会：舘葉月(西洋史学)
文学部卒／立教大学文学部

6月14日(土) 物語の転生と「好き!」の連鎖： 自己発見／他者理解としての受容研究

若澤佑典(英米文学) × 鶴浦恵(中国文学) 司会：北洋輔(心理学)
文学部卒／慶應義塾大学経済学部

〔対象〕高校生(保護者・高校関係者) 〔会場〕三田キャンパス 北館ホール(1階)
〔時間〕14:30～16:30(14:00開場) 〔受講料〕無料

〔参加申し込み〕詳細・最新情報は文学部ホームページに随時アップします。

<https://www.flet.keio.ac.jp/>



〔お問い合わせ〕

慶應義塾大学 三田キャンパス 文学部内公開講座事務局

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

E-mail: bun_kouza@info.keio.ac.jp



■ 文学部入学試験データ

志願者数・入学許可者数

	2024年度	2023年度	2022年度
志願者数	4,131	4,056	4,162
現 役	2,581 (62.5%)	2,387 (58.9%)	2,461 (59.1%)
男子 / 女子	男子 2,277 / 女子 1,854	男子 2,239 / 女子 1,817	男子 2,238 / 女子 1,924
入学許可者	1,196	1,172	1,189
現 役	882 (73.7%)	798 (68.1%)	818 (68.8%)
男子 / 女子	男子 623 / 女子 573	男子 550 / 女子 622	男子 559 / 女子 630

	2024年度		2023年度		2022年度	
	志願者数	合格者数	志願者数	合格者数	志願者数	合格者数
帰国生 (2024/2025年度より募集停止)	25	11	30	13	35	12
留学生	168	34	197	33	200	61
塾内進学	45		48		57	
自主応募制推薦入試	275	129	260	121	343	123

試 験 科 目

- ☐ 外国語 (英語 (独自試験)・独語・仏語・英語 (外部試験利用) のうち1科目を選択)
☐ 地理歴史 (日本史・世界史のうち1科目を選択)
☐ 小論文

日本史・世界史選択者数

	2024年度	2023年度	2022年度
日本史	1,991	1,995	1,941
世界史	2,140	2,061	2,221

※外国語科目は約99%が英語で受験。※入試の年度は入学時の年度で表示されます。

■ 文学部卒業生上位就職先企業

2023年度	2022年度	2021年度
東京海上日動火災保険 16	エヌ・ティ・ティ・データ 15	楽天グループ 12
アクセンチュア 11	アクセンチュア 13	東京海上日動火災保険 11
NTTデータグループ 10	楽天グループ 13	アクセンチュア 10
みずほ銀行 10	デロイトトーマツコンサルティング合同会社 11	エヌ・ティ・ティ・データ 10
アビームコンサルティング 8	博報堂 11	日本放送協会 8
日本アイ・ビー・エム 8	リクルート 10	三菱UFJ銀行 7
東京都 7	大和証券 8	大和証券 6
ペイカレント・コンサルティング 7	東京海上日動火災保険 8	三井住友海上火災保険 5
リクルート 7	三井住友海上火災保険 7	三井住友銀行 5
日本生命保険相互会社 6	りそなホールディングス 7	明治安田生命保険相互会社 5
日本電気 6	凸版印刷 6	りそなホールディングス 5
富士通 6	三菱UFJ銀行 6	NTTドコモ 4
三井住友海上火災保険 6	慶應義塾 5	ジェーシービー 4
楽天グループ 6	サイバーエージェント 5	セブテーニ 4
ジェーシービー 5	日本アイ・ビー・エム 5	第一生命ホールディングス 4
第一生命保険 5	東日本電信電話 5	東京都 4
明治安田生命保険相互会社 5	ファーストリテイリング 5	日本アイ・ビー・エム 4
双日 4	みずほ銀行 5	日本電気 4
電通 4	KADOKAWA 4	富士通 4
日本放送協会 4	SMBC日興証券 4	防衛省 4
野村総合研究所 4	ジェーシービー 4	横浜銀行 4
博報堂 4	電通 4	
三井住友信託銀行 4	日本放送協会 4	
三菱UFJ銀行 4	日本生命保険相互会社 4	
	日本タタ・コンサルタンシー・サービス 4	
	野村総合研究所 4	
	三井住友信託銀行 4	

(注1) 人数は各年5月1日現在の原則として本人からの進路届に基づく。(注2) 各年9月卒業者を含む。
 (注3) 就職者は復職者を含む。(注4) 就職者は進学就職者(進学者と就職者のどちらにも当てはまる者)を含む。

Frequently Asked Questions

入試、学生生活、進路など、受験生の皆さんからよくいただく質問をまとめました。

Q 文学部に入学するにはどのような方法がありますか？

A 一般選抜のほか、文学部独自の制度として「自主応募制による推薦入学者選考」があります。慶應義塾大学文学部を第一志望とし、一定の資格を満たしていれば、だれでも自由に応募できます。また慶應義塾内の5つの高等学校からの塾内進学、外国人留学生入学試験による入学があります。

Q 文学部には、高校のような「クラス担任」はいるのですか？

A 第1学年に関しては、希望する語種によってクラスに振り分けられ、各クラスには1名ずつ担任が付きます。第2学年以降の各専攻にはそれぞれ専攻担任が複数おり、学生生活や履修等の相談に応じます。また、文学部には日吉・三田各々に学習指導、学生部の委員がいます。

Q 第2学年で各専攻に進級した後、専攻の変更はできますか？

A 第2学年進級後の専攻変更は原則として認められていません。第1学年で行われる学部や各専攻のガイダンスに出席したうえで、慎重に選定して下さい。

Q 志望する専攻には必ず入ることができるのでしょうか？

A 多くの専攻では、希望した学生全員を受入れています。ただし、専攻によっては、希望する学生が一定数に達した場合に参考試験などを行うことがあります。

Q 文学部で取得できる資格にはどんなものがありますか？

A 中学校・高等学校教員免許（国語、社会、地理歴史、公民、英語、中国語、独語、仏語、情報）、図書館司書、司書教諭、学芸員などがあります。

Q 文学部卒業後、文学研究科への進学を考えています。内部推薦などによる大学院進学はありますか？

A 文学研究科の場合、今のところ内部推薦はありません。一般入試および留学生入試（修士課程）による入学のみが認められています。



下記のYouTube上に**文学部紹介動画**を公開しています。
教員や学生の生の声をきくことができますので、是非一度ご覧ください。

https://www.youtube.com/watch?v=GLKn_nxSpHs

慶應義塾大学 文学部 ホームページ <https://www.flet.keio.ac.jp/>

学部入試全般に関するお問い合わせ

入学センター 03-5427-1566 〈窓口利用時間〉月～金9:00～11:30、12:30～16:30（土・日・祝日休業）

※お問い合わせの際は、必ず下記URLから事務室の受付状況をご確認ください。

<https://www.keio.ac.jp/ja/admissions/>

- 全10学部6キャンパスおよび入試に関する情報等を掲載した「慶應義塾大学ガイドブック」を配布しています。
- 上記URLから請求することができます。（三田・日吉キャンパスの警備室でも入手できます）

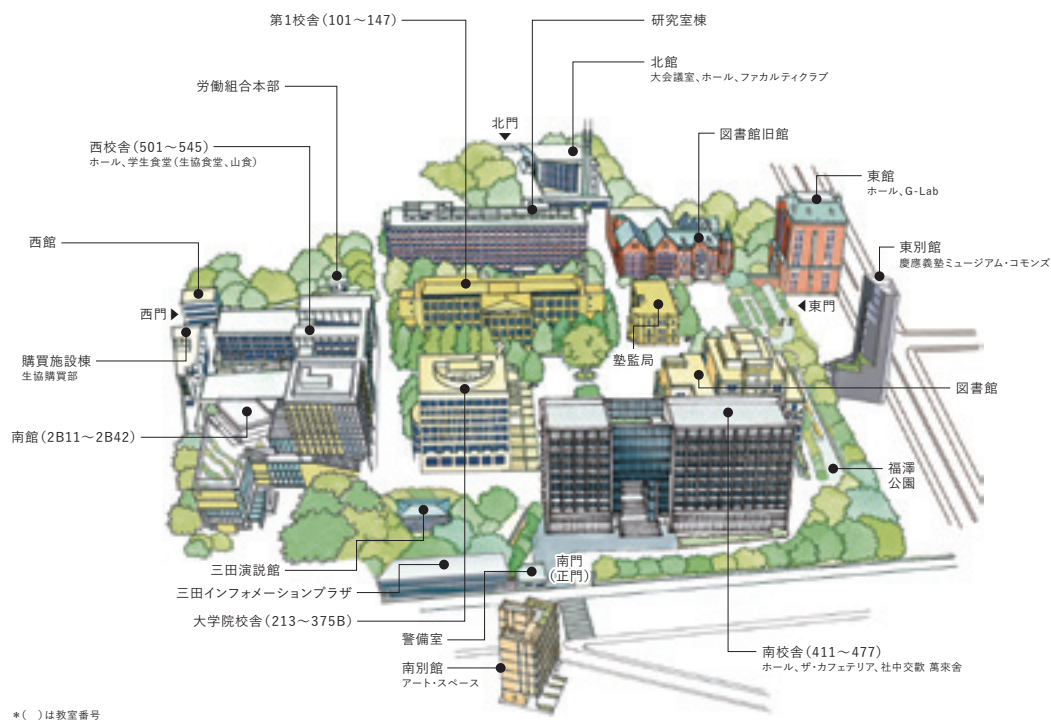
慶應義塾大学 ホームページ <https://www.keio.ac.jp/>

Campus Map



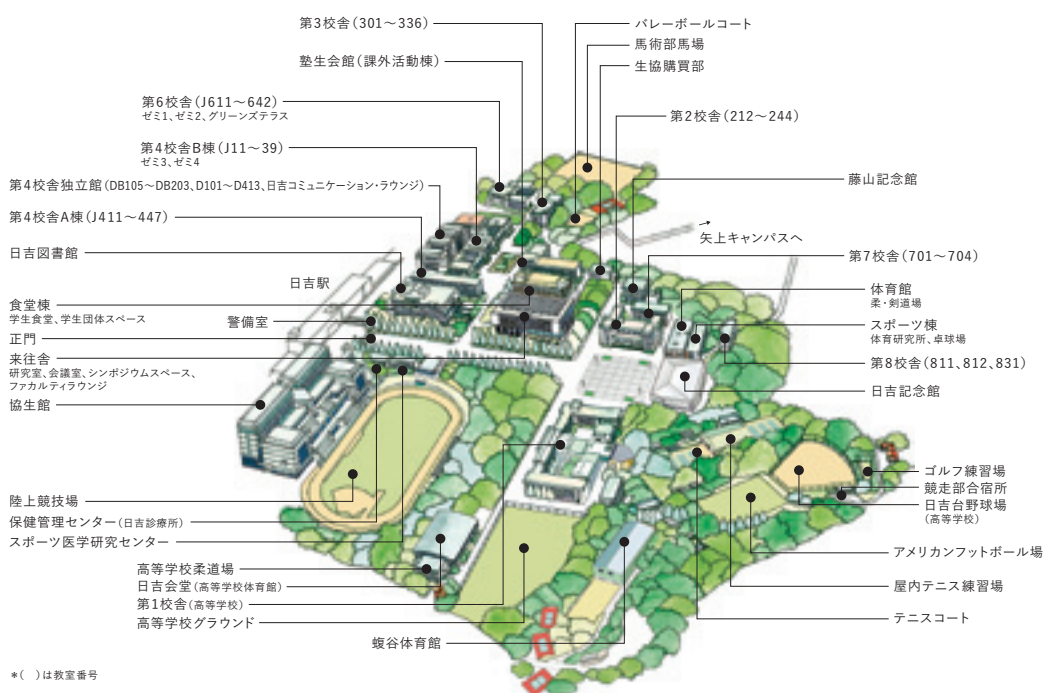
Mita Campus

〔三田〕



Hiyoshi Campus

〔日吉〕





<https://www.flet.keio.ac.jp/>

発行：慶應義塾大学 文学部（2026年度入学者向け）